

道 徒 の 聖



末日聖徒イエス・キリスト教会

内 案 書 図

教義と聖約	高価なる真珠	モルモン経	教義と聖約	高価なる真珠	モルモン経	信仰箇条の研究	モルモンとは	完成への道	初等協会教科書	総合聖句の手引	日本系図探究要覧	古代アメリカの生活	旧約聖書物語	家督権の祝福	扶助協会手引
上質革製合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本	合本
一一〇〇円	三〇〇円	二〇〇円	三三〇円	一〇〇円	二〇〇円	一五〇円	一五〇円	一〇〇円	一〇〇円	一〇〇円	一〇〇円	一五〇円	一〇〇円	一〇〇円	五〇円

日曜学校用	宗教と生活 II	よきおとづれ	聖書物語	福音の實踐	聖典中の指導者	M I A 用	役員と指導書の手引	モルモン経研究ガイド	真理の道	M I A 手引 (付録)	演劇指導者基礎知識と脚本集	演説が上手になる法	社交ダンス必携	新しいフオークダンス	讃美歌及び歌集	末日聖徒讃美歌	末日聖徒讃美歌拔萃	子等は歌う	レクリエーション歌集
一五〇円	一〇〇円	一五〇円	一五〇円	一五〇円	一五〇円	一五〇円	一〇〇円	一〇〇円	一〇〇円	五〇円	七五円	一五〇円	一六〇円	五〇円	三〇〇円	三〇〇円	三〇〇円	一〇〇円	四〇〇円

聖 徒 の 道

1960年10月号



〔予言者のことば〕

自分が何であろうと、自分の役を立派に果せ
…… デビッド・O・マッケイ…(290)

〔伝道部長メッセージ〕

「聖徒の道」が一人前になります
…… ポール・C・アンドラス…(293)

「モルモンの教義」

「始祖アダム」(17) …… 佐藤竜猪…(295)

「大会説教」歴史を顧みて

…… リーヴァイ・エドガー・ヤング…(299)

悔い改め …… 内藤良子…(301)

「系図」神代秘史と耶蘇伝 …… 渡辺正雄…(302)

日常生活と神の教え …… 神崎良太郎…(305)

「ともに考えよう」

「己の如く汝の隣りを愛すべし」という誠命の
理解について …… 福田正勝…(306)

真の神様を知って …… 青木サダ…(309)

ひとつの安心 …… 高橋ちよの…(310)

私は今日バプテスマを受けます …… 青木喜久雄…(311)

オッペンハイマー博士の講演を聞いて

…… 山田政伯…(312)

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹(10)

ジョセフ・フィールディング・スミス…(315)

ユタ物語(1) …… リーヴァイ・エドガー・ヤング…(318)

「新しき歩みへの大会」

日本人による初めての地方部長会組織される

…… (322)

松方コレクションを觀賞して …… 塩 英雄…(323)

歴史的大会を終って …… (324)

日本伝導部開説の由来 …… (325)

伝道本部だより …… (328)

も
・
く
・
じ



予言者のことば

「自分が何であろうと、

自分の役を立派に果せ」

大管長 デビド・O・マッケイ

私は自分の書齋に一冊の小さな本を持っているが、その中には教会の著書、いろいろな詩、そのほかスコット、バーンズ、ロングフェローなどの作品からの抜粋が載っていて、私はこれらを「言葉の珠」と呼んでいる。その中のいくつかを諸君と共に考えてみよう。

「人生の最も大きな戦いは心の中の静かな部屋で戦われる」……わが教会のため、同じ業にいそしむ諸君よ、疑いもなく諸君がこれまで度々行ってきたこと、すなわち心を静めて自らと語ることを再び行っていたきたい。人生は諸君がまた私が毎日戦う戦いである。この戦いを自分自身と戦って、自分の家族、自分の教会、自分の隣人に対する義務に就いての方針を決めたまえ。

その頁には次の解説が共にのっていた、それは「単純な生活」からの一節であって

「まず第一に、君は自分の国、自分の市、自分の家庭さては自分の作業場の一部分となれ。もしできるなら、次にそこから出発してそれ以上に進め。それは明らかな自然の順序であるから、君はこれが逆になったときにどうなるかの

確かな物の道理を知って自らを強化しなくてはならない。各人は自分に関わりのあることよりもほかの事に気を奪われていることが非常に多い。彼は自分の持場から離れている。彼は自分の商売を無視している。これが生活を複雑にするのであって、各人が自分の仕事に従事していたら生活は単純になるであろう」と。

人生の最も大きな戦いは、自分の心の中の静かな部屋で戦われることをいつも忘れずに、自分の義務が何であるかを決めたまえ。

次に私がとり上げたのは「自分が何であろうと、自分の役を立派に果せ」という言葉である。

もちろん、これは道徳的なまた合法的な努力に就て言われることであって、有害なまた悪い行いに就てではない。

私は前にあなたたちの数人に話したことがあるが、この言葉は今から五十九年以上前ピーター・G・ジョンストンと私がスコットランドのスターリング城のまわりを歩いていたとき、私の心を強い力で動かした。私はそのとき落胆していた。ちょうどそのとき私は最初の伝道を始めていたのであった。その日私はトラクティンクをしていたが一人も受けとってくれなかった。私はホームシックにかかり、二人はスターリング城のまわりを歩いていた。明らかに私たちは義務を尽していなかった。私たちがもう一度町へ入ったとき、そこに半分建ちかけていた一軒のビルディ

ングがあったが、私はその建物の入口の上の石に刻んである文字を歩道から見てちょっと驚いた。そしてジョンストン兄弟に「僕はあそこへ行つて、何と刻んであるか見たい」と言った。私がそこへ行く道を半分も行かないうちに「自分が何であろうと、自分の役を立派に果せ」という文字が私の心を強く打った。

私がジョンストン兄弟のそこへ戻ってきて自分の読んだことを話したとき、あなたたちは何がまず私の心に浮んだか解るか。それは、私が卒業してきたばかりのユタ大学の管理人の姿であった。その時私は、私が教えを受けたどのような教授にも劣らない尊敬を彼に対して持っていたことを悟った。彼は自分の役を立派に果した。私は彼がフットボール競技用の服に就いて私たちを助けたこと、私たちのレッスンに就いて助力をしたことなどを思い出した。彼は高ぶらず、もったいぶらずに自分の義務をよく果した。今日に至るまで、私は彼に対する尊敬を失ってはいない。

普通の人がその町のシェリフ（治安を司どる官吏）に任命されると、彼に何ものかがつけ加わる。警官が手を挙げると君は立ち止る。それは普通人以上の何ものかが警官にある。すなわち警官は権能を持っているからである。

いたるところの人生に於てもその通りである。高められることなしに地位を与えられる人はない。それは本当である。神権の権能に就いてもその通り本当であるから、使徒

ペテロの時代にトリックによって金をもうけていた魔法師のシモンは、ペテロの持っているものを買いたいと思い、使徒たちに金をさし出して言った。

「わが手を按くすべての人の聖霊を受くるようにこの権威をわれにも与えよ」と。

このときペテロの発した非難の言葉の強かったことよ！

「汝の銀は汝と共に亡ぶべし。汝金をもて神の賜物を得んと思えばなり」われ汝が苦き胆汁と不義の繋ぎとに居るを見るなり、「されば、この悪を悔改めて主に祈れ、汝が心の念いあるいは赦されん」と。このようにペテロの非難が激しかったので魔法師シモンは

「汝らの言うところのこと一つもわれに來らぬよう汝らわがために主に祈れ」と言った（使徒行伝八〇十九―二十四）。

ペテロの心には聖霊の力が本当に在ることに就いて何らの疑いもなかった。「自分が何であろうと、自分の役を立派に果せ」。

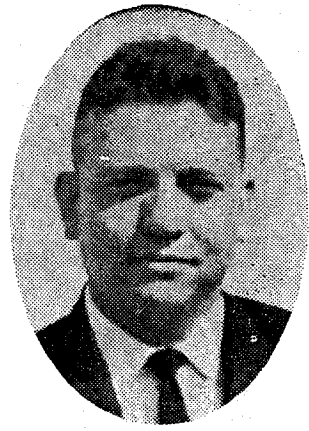
第三は「他の者によりては救いを得ることなし、天の下にはわれらの頼りて救わるべき他の名を人に賜いしことなければなり」（使徒行伝四〇十二）という言葉である。

この言葉がペテロによって発せられたのは非常に劇的な場面に於てであった。従つてその思想は次のように言い表さる「世に望む希望と將來の定めとはガリラヤの人、

われらの主なる救い主、イエス・キリストの一点に集る」と。

あなたたちが一生の戦いを戦っている瞬間に、ちょっと自分を反省して、あなたたちがそれを本当に信じているかどうかを見てみたまえ。ポール・ケインはかつて次のような質問を発したことがある「イエスは歴史に現われた伝説上の人物にすぎないか、教会の窓のステインドグラスに彩色してある聖人にすぎないか、近より難いまた名前も挙げられない一種の妖精にすぎないか、あるいはまたこの世で肉体に宿っておりたもうた時のままのお方であるか、われわれと同じ情を持つ人、実体、人類の長兄、案内者、指導者、慰め主、また気高く生活するよう過去から呼びかけ、勇敢に導き、われわれの勇気を最後まで支える偉大なる声であるか」と。

私と同じ業にいそしむ人々よ、あなたにとって彼は何であるか。あなたはひざまずいて祈るときに、あなたが今祈っているお方と話しをしているのだと感ずるようにラジオの如く働く力またはそれ以上強い力を感じるか。あなたは祈りの言葉を出しているだけではない、祈りによって神と話しをしているのである。あなたはその方が真実生きて居りたまひ、われらの主、教会の頭首であることを知っているか。



「聖徒の道」が一人前になります

ポール・C・アンドラス

「聖徒の道」は末日聖徒イエス・キリスト教会の機関誌、日本語で書かれた公認の雑誌であります。「聖徒の道」

、もとの「LDSメッセンジャー」が中断された時、千八百五十七年の七月に第一号が出ました。その当時はたった三百部が毎月配布されたのに、現在、毎月三千部が配布されるまで成長しました。これまでの三年間は苦闘の連続でしたが、今や「聖徒の道」が充分に一人前となった定期刊行物として世界に座を占める時がまいりました。

文字通り完全な一人前となるために昇るはしごの最後の一段は大きなものですが、「聖徒の道」は千九百六十年の十月号を以てこの最後の飛躍をすることが決定しました。この十月号をごらんになれば、前月号に比べてすぐれた進歩がはっきり見られるにちがいありません。頁が前よりも増している上に、記事もその種類が豊富になっておりま

す。要するに「聖徒の道」はこれまでよりも大きい更に良い雑誌になったのでありまして、「聖徒の道」をして日本語で出版されている最良の教会雑誌とするのが私たちの目標であります。

「聖徒の道」が一人前となるために編集部員の全組織を改めて作り直し、新しい方針を樹てました。大塚昌治兄弟が編集長として残ることを承諾して下さいまして渡辺正雄、今井一男、佐伯忠晴、福田真、山田政伯、佐藤竜猪の諸兄弟も東京に於ける編集部に働くことを同意されました。その上、高木富五郎、安芸宏、遠藤肇、福田濃、福原俊明、柳沢俊雄の諸兄弟も東京以外の地域の編集者として寄稿して下さいることを承知して下さいました。以上の諸兄弟はみな無料で奉仕することを承諾なさいました。この編集部員の再組織の結果「聖徒の道」は非常によくになり、また無料

奉仕の方針を採用することによって出版費の収支を償う役に立つにちがいありません。

あらゆる組織またはあらゆる活動が自力で費用を支弁するのが、わが教会に於ける確立した原則であります。自力で費用を支弁する能力のあることは何組織に於てもそれが一人前になった一つのしるしであります。従って、私たちは「聖徒の道」が今後自力で費用を支弁して行くことを確かめたいのであります。今になるまで、教会は「聖徒の道」に補助金を出して最初の困難な数年を過すのを助けてきました。が、今後は「聖徒の道」が自力で運営されんことを望みます。「聖徒の道」の頁数を増し、記事を精選し、同時に出版費用を自力で支弁してゆくことを確めるためには、雑誌代を一部売り四十円、一年分四百五十円（郵送代共）に値上げすることが必要であります。このように値上げをしても、この品質の雑誌代としては非常に合理的な値段でありますから、私はぜひ会員諸君が一人のこらず「聖徒の道」の予約をし、また「聖徒の道」をほかの人々に売るように強く勧めるものであります。もし私たちが皆協力するならば、「聖徒の道」を黒字にして、今後財政上の理由で中断をしたり品質をおとしたりすることがないでありましょう。

「聖徒の道」が一人前になるというこの歴史的の折に当って私は「聖徒の道」に挙手の礼を捧げます。「聖徒の道」

は偉大な雑誌でありますから、教会のために友人や改宗者を獲得する大事業を為し遂げ、またこの地球上に住む日本語を話す無数の「天父の子供たち」の中に、イエス・キリストの真の福音の知識を弘める大事業を為し遂げるにちがいありません。私は各編集者諸君及び「聖徒の道」をつくるために自己を忘れて働いている方々のすべてに挙手の敬礼をいたします。また私は、同じように自己を忘れて「聖徒の道」を売って下さっているすべての会員とすべての宣教師に挙手の敬礼をいたします。私はこの偉大な雑誌がぜひ成功を収めるように祈る次第であります。

（二九二頁よりつづく）

機械を動かしている人、畑をたがやしている人、本を書いている人、そのほか何をしている人であっても、突然かつとなる人は弱い人である。神権をもっている人はかっとなるべきではない。威厳を失わないようにすることを覚えよ。あなたはかっとなるようなキリストを頭に画くことはできない。罪を見たときには憤慨するか。然り、キリストは両替屋たちが神に無礼を働き神殿を汚したとき彼らを追い出したもうた。その通りであったが、キリストはまた威厳に満ち気高いお方であったから、ピラトの前にお立ちになったときピラトは「見よ、この人を」と言うを禁ずることができなかった。

「始祖 アダム」 (十七)

佐藤 龍 猪

われ主なる神、土の塵を以て人を造り、生命の息をその鼻孔に吹き入れたる。人すなわち生ける「霊の結合体」となりぬ。

「高価なる真珠」 モーセの書三〇七

一、アダムの創造

主なる神はアダムがエデンの園に於て禁断の実を取って食った後に、アダムに向つて仰せになった「汝は顔の汗によりて食物を食い、而して終に土に帰る。汝は正に死ぬべければなり。そは、土の中より汝は取られたればなり。汝は塵なりき、さればついに塵に帰るべし、と」(「高価なる真珠」モ一セの書四〇二十五)。

旧約聖書創世記第二章七節、モルモン経アルマ書第四十二章二節、および「教義と聖約」七十七章十二節等にある聖句はみなアダムが「土の塵」から造られたことを示している。また伝道の書第十二章七節には

「而して塵は元の如くに土に帰り霊はこれを授けし神にかえるべし」と言つてある。

天地創造の第六の時に、神々は土の塵を以て「神々の像の如くに」(「高価なる真珠」、モーセの書二〇二十六) 人を造り、その人の霊(すなわち人間の霊)をとつてこれをその中に入れ、その鼻の孔に生命の息を吹き入れたもうたところ、その人はすなわち生ける「霊の結合体」となった(「高価なる真珠」アブラハムの書五〇七)。これすなわち地の上に於ける最初の肉ある者であつて、また最初の「人間」であつた(「高価なる真珠」、モーセの書三〇七)。「すべての人の最初なる者、われこれをアダムと名づく。而してこれは数多なり」

(「高価なる真珠」、モーセの書一〇三十四)。アダムは全人類の父であるから、その名の意味は「数多」であるといふのである(「予言者ジョセフ・スミスの数え」一六七頁の註参照)。この最初の「人間」であることに就て、ルカ伝第三章三十八節には単に「エノス、セツ、アダム、そして神にいたる」と見えてゐるが、ジョセフ・スミス改訳聖書ルカ伝第三章四十五節には「エノス、セツ、および神によりて造られ地上に於ける最初の「人間」なりしアダムにいたる」としてある。

この地上に於ける最初の「人間」、すなわち「最も老いたる者」(Ancient of Days)(ダニエル書七〇九一十四、「教義と聖約」第一百十六章参照)は、この地上に来る前「高貴にして偉大な」霊(「高価なる真珠」、アブラハムの書三〇二十二)の一人、天使長ミカエルであつた(「予言者ジョセフ・スミスの教え」一五七頁および一六八頁参照)。

天使長ミカエルは、この地上へ来てアダムとなつたが、なお霊体で在った時に同じく霊体で在ったイエス・キリスト(旧約聖書のエホバ)(「救いの教義」第一卷二十七頁参照)と共に地球創造の事業に参加した(「高価なる真珠」アブラハムの書三〇二十四、「救いの

教義」第一卷七十四頁参照)。

アダムは土の塵から成る骨肉の体を持つことになったが、その前身は「高貴にして偉大な」靈の一人であって、人類の靈にその宿るべき骨肉の体を与えるために遣わされたのであった(「救いの教義」第一卷九十頁参照)。従って、われわれ全人類は、アダムによって、われわれの靈が宿るべき骨肉の体が与えられた。

二、エデンの園に於けるアダム

人は土の塵から造られた体に宿って、生ける「靈の結合体」と成ったが、始めその体は血液によって生かされていたのではなく「^{スピリット}靈」によって生かされていた(「救いの教義」第一卷七十六頁及び九十二頁参照)。それであるから、アダムは始めエデンの園に置かれた時、骨肉を具えた一種の靈体、血液によらず「^{スピリット}靈」によって生かされる具体的体^{スピリット}を具えていて、律法を破ることによって「^{おち}墮ち」なければ、その状態でいつまでも居たことであろう(「ニーファイ第二書二〇二十二参照」。従って、エデンの園に居た当時、アダムの体は不死不滅の体であった。しかし、この不死不滅の体は、人

が死んだ後に受ける復活体とは異なる体であった。復活体は靈と体が再び離れることができないように結合している意味に於て不変の体であるが、アダムの体は律法を破って禁断の実を食うことによってその性質が変り、「死ぬべき体」となったからである。すなわち、禁断の実はアダムの体内に血液を生ぜしめる力を持っていたので、これを食うことによってアダムの体の性質が変り、始めの不死不滅の体は「死ぬべき体」になってしまった(「救いの教義」第一卷七十七頁参照)。

アダムはこの地球に来る前、別の地球の上に生きて居たが、死んだ後復活してこの地球に來たのであるという説を為す人々がある。しかし、死んだ後に一度復活体を得た者は、日の榮の国に入ろうと、月の榮の国に入ろうと、星の榮の国に入ろうと、また「^{はろ}滅亡」の子らとなって暗黒の中へ追い払われようと、再び死ぬことはない。復活体は靈と体が再び離れることのないように結合している体であるからである。アダムの体は禁断の実を食うことによってその性質が変り「死ぬべき体」と成ったのであるから、アダムの体が復活体でなかったこ

とは明らかである(「救いの教義」第一卷九十一頁参照)。

三、最初の「人間」アダム

「高価なる真珠」モーセの書第一章三十四節には「すべての人の最初なる者、われこれをアダムと名づく」とあり、同じくモーセの書第三章七節には「すなわち地の上に於ける最初の肉ある者にしてまた最初の人間なり」とある。このほかモルモン經ニーファイ第一書五〇十一、「教義と聖約」八十四〇十六等にある聖句はみな、アダムが人間の始祖であることを示している。予言者ジョセフ・スミスの改訳聖書ルカ伝三〇四十五に於てもアダムが「最初の人間」である旨が見えている(本稿一参照)。「予言者ジョセフ・スミスの教え」百六十七頁には「最初の人間にして『最も老たる者』とダニエルの書に言われしアダム、言葉を変えて言わばすべての者の最初に於て最も古き者、太祖アダム」と言っている。

人間の太祖アダムは、未開の猿人としてこの地球上に置かれたのではなくて、驚嘆すべき英知を具えた完成した人間として地球上に置かれた。アダムは前世に於て、この地球上

へ遣わされて「最初の人間」となり、人間の太祖となつてその子孫の上に立つたために選ばれた。アダムは、前世に於てミカエルであつた時、靈界に於ける最も偉大な「英知」の一人としてイエス・キリストの次に位していた（「救いの教義」第一卷九十五頁参照）。

アダムはこのように驚嘆すべき英知を具えた人間として完全な言語、天使たちの話し合う「いと高き神の言葉」を語り、「主のみたま」によつて導きとめぐみを受けた。またアダムはエデンの園を出た後も神の言葉を聞いて「救いの計画」を知らされ、福音を教えられた。或る人々は、モーセがイスラエルの人々を約束の地へ導いて行く途中に始めて「十誡」が与えられたと考えているが、「十誡」は世の始めから存在している、アダムの時代にも義しい人々に教えられていた。「十誡」はイエス・キリストの福音の根本を形づくる部分であり、福音は完全なままアダムに教えられていたからである（「高価なる真珠」モーセの書五〇五十八、六〇五・六、四十六、「救いの教義」第一卷九十五頁参照）。

四、アダム・オンダイ・アーマン

「主言いたまへり。アダム・オンダイ・アーマンとは、アダムがその民を訪れんがために来るべき地なるが故に、すなわち予言者ダニエルによりて言われし如く『最も老いたる者』の坐すべき地なるが故にかく言うなり」（「教義と聖約」第百十六章）。

千八百三十八年五月十九日、予言者ジョセフ・スミス、シドニー・リグドン、およびジョージ・W・ロビンソンの三人は市を建設する地所を選定するためにミズーリ州デビース郡ワイツ・フェリーの近くにあるスプリング・ヒルという地へ赴いたが、その時予言者ジョセフ・スミスは啓示によつてこの地をアダム・オンダイ・アーマンと命名した。此所は、啓示によれば、「アダム死なんとする三年前に当り、すべて大祭司たりしセツ、イノス、カイナン、マハラリール、ジェレド、エノク、メツセラおよびその他の義しかりし彼の子孫らを」呼んで最後の祝福を授けた所である（「教義と聖約」百七〇五十三）。また聖徒らが王国を所有する前に、アダム（「最も老いたる者」）が審判の席に着く所である（ダニエル

書七〇九―十四、二十二参照）。

「ダニエルは『最も老いたる者』のことを言っているが、それは最も古き人、すなわちわれらの先祖アダム（ミカエル）のことである。アダムはその子らと呼び集めて「人の子」の来りたもうための備えを為さしめるため、彼らと共に会議を開くであらう。彼アダムは全人間の始祖であつてすべての者の霊を統轄する。この大会議に於て諸々の『鍵』を保有する者はすべて彼の前に立たねばならぬ。このことは、われわれがこの活動の舞台を去らぬ前に起るかも知れない。以上は千八百三十九年六月二日の説教に於て、予言者ジョセフ・スミスの述べた言葉である。

またオルソン・プラット長老は「アダムが住んでいたアダム・オンダイ・アーマンすなわち『神の原』はミズーリ州ジャクソン郡の北方約五十マイルの所にある。アダム（といふはエデンの園を出た後）の後半生をここで過したことを主がわれらに啓示したもうた。始めからここに住んでいたかどうかはわれらに解らない。アダムはその初期の時代をここから数千マイル離れたところで過したかも知れない」と言っている。（「教義と聖約」の註解」四八二頁参照）。

（「教義と聖約の註解」四八三頁参照）。

余 録

ライマン・ワイトは、このアダム・オンダイ・アーマンと命名された所、すなわちスプリング・ヒルに千八百三十六年もしくは千八百三十七年に居を占めていたが、このことがあってから多くの者が急速に入植して来て、千八百三十八年の夏には約二百戸の家が建った。その一方、幌馬車の中に起居していた多くの家族もあった。而して、千八百三十八年六月二十八日にステーク部が組織されてジョン・スミスがステーク部長に、レイノルズ・カフーンとライマン・ワイトが副ステーク部長となった。ところが、多数の教会員が入植してきて新しい入植地が急にふえて行くことが、土地の住民に憎悪の念を起させた。そして、武装した暴徒に脅威されていたファーウエストを助けるために、ライマン・ワイトを始めとして百二十名の乗馬隊がアダム・オンダイ・アーマンを空けて出かけた後、暴徒が起って聖徒らの家を略奪し、それまで栄えていた入植地をことごとく滅ぼしてしまった。

現在その町のあった場所は牧場になっていて、その昔家々や商店の建っていた跡にはレンガと石塊が残っているだけである

予言者ジョセフ・スミスは言った「私は聖書の原文を書いた著者の筆通りに聖書が書かれている時に聖書を信ずる。無智な翻譯者、不注意な写生字、もしくは何か企らみのある腐敗した教職者たちは多くの誤ちを犯している」と。

創世記第六章六節には「主は地の上に人を造ったことを悔いて、心を痛め（一九五五年改訳、旧約聖書）とあるが、これは民数記第二十三章十九節にある「神は人のように偽ることはなく、また人の子のように悔いることもない」（一九五五年改訳、旧約聖書）という句と矛盾している。聖書をそのまま文字通りに信ずると主張する人々は、この矛盾を何と説明するであろうか。

ジョセフ・スミス改訳聖書、創世記第八章十三節には「ノアは、主が地の上に人を造りたもうたことを口惜しく思つて、心を痛め」（仮訳）としてある。

ジョセフ・スミスは「こうだと私は信ずる。これでこの句は他の句と正しい関係にある」と言っている。なお参考のために英

語の聖句をかがけておく。

「And it repented the Lord that he had made man on the earth, and it grieved him at his heart」(Gen. 6:6)

「And it repented Noah, and his heart was pained, that the Lord had made man on the earth,」(Inspired Revision: Gen. 8:13)

（「ジョセフ・スミスの教え」三百二十七頁参照）。

「創造という言葉の意味」

旧約聖書第一章第一節に「はじめに神は天と地とを創造された」（一九五五年改訳）という聖句がある。この「創造」という言葉が「無から有を造った」と解している人々があれば、原著者の意を誤って解しているのである。改訳以前の旧約聖書には「元始に神天地を創造たまえり」と特にルビが振ってあるのは翻譯者に慎重な用意があったものと思われる。何となればヘブライ原本にある「baurau」という語は「無から有を造る」という意味ではなくて人が材料を組織して家を造るように「組織する」という意味をもっているからである。

（「ジョセフ・スミスの教え」三五〇頁参照）

歴 史 を 顧 み て



第百三十回大会演説

リーヴァイ・エドガー・ヤング

(七十人会評議員会々長)

マッケイ大管長、クラーク副管長、モイル副管長、並に兄弟姉妹の皆さん、この美しき日に私たちは、ここで我らの父なる神並に我らの贖主、イエス・キリストを礼拝して居ります。私は皆さん一人々が、この気持で感謝の念と喜びを以て主の僕の言葉に耳を傾けようとして居られることを知っています。ここに私たちが好んで学び考える多くの歴史的な事実があります。昨年私は、クリストファ・コロンブスを学びました。歴史家たちは私たちにコロンブスは西の海の彼方に陸地が見出されると感じたと言っています。イタリアの学者、バドレ・クレメンティスの書いた歴史書の中にコロンブスが十月十二日金曜日の朝、新大陸に上陸した時に捧げたであろう祈りの言葉が述べられてあります。

コロンブスはスペインの皇帝と后にあてた手紙の一つの中で、彼は神の御手の内に強く前進するのであると言っている。ワシントン・アルヴィングによればコロンブスは、サン・サルヴァドアに上陸した時、次のような祈りを捧げました。

「おお我らの父なる神よ。天地及大海の創造者、永遠にして全能なる神よ。我らは汝の聖なる御名を讃え汝の権威をほめ心からへり

くだって仕えんとする。我らはこの世界の新しい地を汝の御手の内に委ねる。」

プリマス・ロックはその後、アメリカの自由の象徴となったが、その自由はすべての人の権利を正しく尊重することと宗教の永遠性を認識することによって生ずるのであります。先祖清教徒たちは神に深い信仰を持っていました。彼らが地図にも載っていない遠いアメリカに渡って来たのは、この地上に神の王国をもたらず為の神の御心によるものであります。救主降誕の数世紀前に予言者ニーファイは将来を見こして言っています。

また私が眺めるのに大海があつて、それが異邦人と私の兄弟たちの子孫とをへだてているのが見えた。

眺めると、私の兄弟たちの子孫と大海をへだてている異邦人の中に一人の男が見えた。すると神の「みたま」が降りたもうて、この男に靈感を与えたもうたから、この男は大海を渡って約束の地にいる私の兄弟たちの子孫のところへ行つた。私はそれからまた神の「みたま」がほかの異邦人にも働きたまひこの人たちが束縛の身の上から免れて大海を渡って行くのが見えた。

私ニーファイが眺めるに束縛の身から免

れた異邦人はまことに主の御前にへりくだったから主の御力がかれらと共にあった。

(ニーファイ第一書、一三・一〇・一二・一三・一六)

清教徒たちがアメリカに来て文明の種をまいたのは神の御心によるものであります。メイフラワ憲章(誓約)によって彼らは、人類に知られた最高の政治形態である共和国を成立したのであります。そのような共和国を成した時代迄、知られなかったもので、このような人々の住む国で始めて可能なのであります。この大陸は正しく教育された正しい人が荒野に彼らの家を建て、今まで知られたよりも遙かに大きな目的の為に、その土地を用いるまで、人々に知らされなかったものであります。これらのキリスト教徒たちは荒野に新しい神の都を建てようとし、昔からクリスチャンのけんそんの象徴であった魚を彼等共和国の徽章としました。

ジョン・ロビンソン牧師は有名な清教徒の一人であつたがついにアメリカの地を踏みませんでした。一六二〇年に小さな一団がオランダのレイデンを出発する時、彼の祝福を受けたが、彼はその中で言っています。兄弟たちよ、私たちは今やお互に別れようとしています。私はもう生きて再び貴方たちにお目にかかれないうちも知れない。天の神だけがそれを知っている。それは神の御手の内にあることで私は神と天使の前で貴方たちに命ずる。貴方たちが私に従ったのは私を通して主、イエス・キリストに従ったのであり、もし神が他の人によって貴方たちに如何なることを示すことがあつても、かつて貴方たちが真理を受け入れたようにそれを受け入れなさい。私は神がもっと多くの真理を語るであらうことを確信せざるを得ない。そして私は、宗教改革以来、革新された教会が改革当時より何らの前進をもなしていないことを非常に悲しく思う次第である。

私たちが予言者ジョセフ・スミスによって回復された福音に祝福されそれを証として持っていることを感謝するわけがここにあるのであります。何故私がこの事を話すかと言うとこの集りに教会外の多くの人々が居るからであります。

多数の人々が福音を受け入れましたが、我々は何の如何なる人たちよりもイエス・キリストの福音の純真な教えを信じているのであります。それは誠に素晴らしいことであります。

聖徒たちが西方へ移動する時、彼らは神の予言者に導かれたのであります。彼等はこの盆地に定着したのであります。この盆地は山よもぎの茂る、夏は乾き冬は寒い処でありました。彼らは一八四七年に來たがそれから引き続き、ユタ州が出来るまで大人数々の聖徒たちの群がここに入植して來たのであります。一八四七年末にブリガム・ヤング大管長の民に對する最初の布告が發せられました。それは彼及び末日聖徒たちが、すべての民に對していただいている大いなる愛を示しています。

聖徒たちよ、大いなるエホバにより世のほまれある人々よ、賢き人、知識ある人、富める人、位高き人々よ來たれ、全地の面のすべての民、種族、王国から出て來たり、このエンマニエルの模範的社会に加わり、我らを助けて神の王国を建て、真理と生命と救いの原則を確立せよ。さらば貴方たちは主イエス・キリストが來て彼の宝座を打建てる時、清められた者の内に数えられてその報いを得るであらう。そして地上或は地獄に於て、如何なる力も貴方たちに勝ることはないであらう。

神の王国は正しい原則から成っている。そして人が、長老派か、メソジストか、浸礼

派か、或は末日聖徒モルモンであるか、或はまたキャンベライトか、カトリックか、監督派か、マホメットか、或はまた異教徒であろうかにもかかわらず、もしその人が跪いてイエスがキリストであることを告白し、社会の健全な法則を支持するなら我々は彼を兄弟として並び立つであらう。何となれば各人の信仰は、その人、個人の靈魂と彼の神だけとの間のことである。けれども人がもしイエスを拒み、神を呪い、宴樂に耽り、罪惡を犯し、うそをつき、誓い、盗み、大いなる神の名をみだりにし、すべての惡を行ふなら彼は我々の内に住む場所を見出さないであらう。何となれば我々は長い間、正しく働らく人、ひとしく正義を分かち合う人、神を認める人、我々が信じ世界のすみずみ迄に宣言する福音の聖なる律法と儀式を重んずる人々を求めていたからである。

終りに私は私の尊敬する友人に就て一言申上げた。

ユタのカトリック教会の長であるドウアン・G・ハント監督は先日亡くなりましたが、彼は実に立派な人でした。そして彼は一年足らず前に訪問者に次のように言いました。

私がはつきりと知っている一つのこととはモルモン教の人たちは世のすべての人に対し親切であり、人々は神が生き給い福音が回復されたと言う彼らの証を宣べ伝えている。

今朝私たちに話をし
て下さった方々にまた
本日及び水曜日に話さ
れる方々に信仰の耳を
傾けようではありません
か。そして成長しよ
うではありませんか。
それは私たちの救いで
あり生きる喜びであり
私たちはそこに人生の
意義を見出すことを確
信します。

神が聖なる神權を通
して、私たちを祝福し
給うよう主の御名によ
り願ひ奉ります。

アーメン

悔い改め

広島 内藤 良子

低く頭を垂れ

誠もて悔い改むる者

神のみ手はその頭にぞ置かるるなり

罪大きければ

神のゆるしも亦大いなれば

彼は神の愛の如何ばかり大いなるかを知らむ

涙頬をぬらせど

心よろこびに慄え

感極まりて号泣せむ

神遠くに在さず

げに人と神を距つるものは

人の心の惡なりと知る

神代秘史と耶蘇伝

渡 辺 正 雄

(伝道部系図委員会会長)



竹内宿弥六十六代目の子孫 竹内巨磨氏

甲府支部長の「元采孫」^{ガンダーソン}長老に耶蘇伝を含む我國の神代秘史に就て、是非小論にまとめてくれと頼まれていたので、この機会に大略を発表して見たいと思う。

この神代秘史は神代文字で書かれ、元采皇室に保存されていたものであるが今日茨城県磯原に皇太神を祭っている竹内宿弥の六十六代目の子孫、竹内巨磨氏が保存しているのである。巨磨氏はこれが日本の正統なる歴史であると主張し一部の支持者の力を得て一時これを世に発表しようとしたが文部省当局に禁止されたもので世にこれを磯原文献と言ひ伝えられている。巨磨氏の説によると武烈天皇の時、当時伝来した仏教が旺盛をきわめそれまで宮中に保存して来た神代秘史が輕視さ

れ、棄てられる恐れがあったので宿弥は孫の真鳥宿弥をしてこれを持たせ越中に派し、日本歴史上には真鳥、逆賊につき誅せらるゝとして抹殺し、その実、真鳥は越中に於て七年間かかってこれを漢訳したので、その何十巻かを今日も巨磨氏が保存していると言っているが、その第一巻は日本の天皇家の系図であるが、これによると神武天皇が第九十八代で今上天皇は第二百二十二代となっている。その冒頭に旧約聖書エレミヤ記から次の聖句が記されているが、若しこの神代秘史が史実的に少しでも根拠のあるものとするならこの聖句は後世に於て誰かが挿入したものではないかと思われる。事をおこなふエホバ、事をなしてこれを成就するエホバその名をエホバと名する者かく言う汝我によび求めよ。われ汝に応へん。また汝が知る大なる事と秘密^{かくれ}たることを汝に示さん。

この神代秘史の一部に耶蘇伝としてイエス・キリストの日本渡来と日本伝道のこと記されている。キリストは三十四才で太平洋を渡って現在の青森県の八戸港附近に上陸し十和田湖附近の戸来(へらい)村(これはヘブライから転化したと言われる)に定着し日本に帰化し家庭を持ち日本中に伝道して百

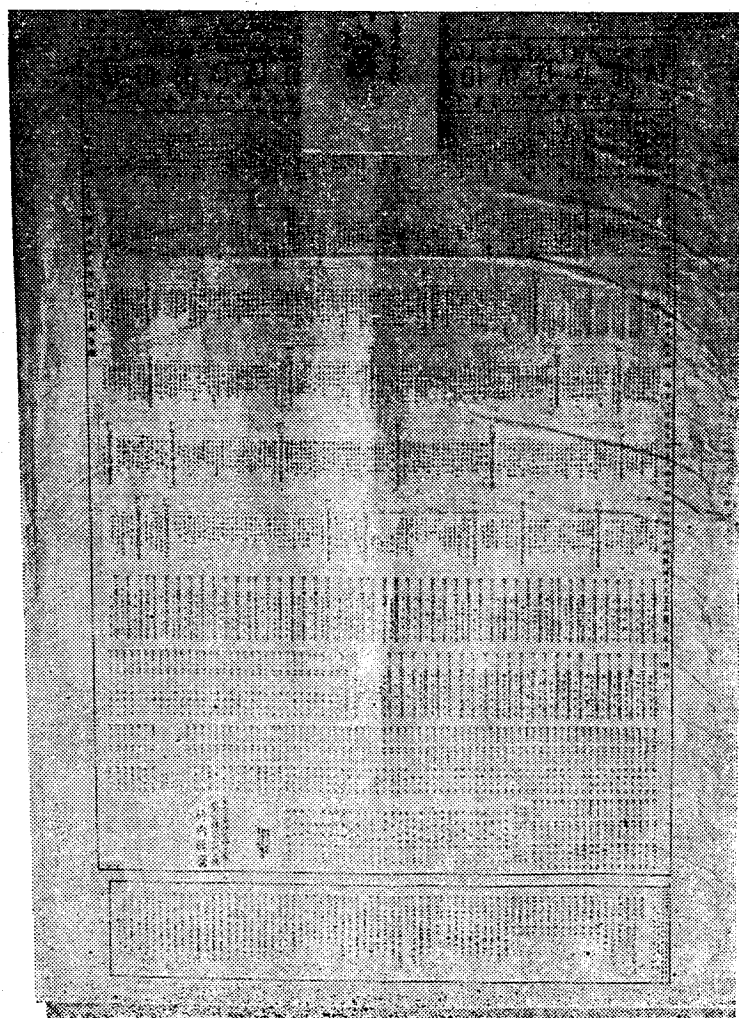
才以上の長寿を全うしたと言われる。キリストはユダヤ人で鼻が高く神出鬼没して当時の人々を救ったので天狗と呼ばれ、日本で古くから伝えられている天狗の呼び名はキリストのことだそうである。また私の母の郷里は福島県相馬郡石神村であるが、この村名などはイエスを記念してイエス神村と呼んだものが石神になったとのことである。現在戸来村にキリストの墓と母マリヤ及びキリストの弟とを祭った墓が在る。カルバリの岡で十字架にかかったのは実はキリストの弟でキリストは母マリヤと弟の遺髪を持って渡来したのでその遺髪をこの一方の墓に埋めてあるそうだ。キリストは日本に来て十来太郎天空坊と改名し十和田湖の十もそれを記念したものだそうで戸来村の人たちは今日でも子供が生れるとその額に十字を記して親戚にお目見えさせるそうである。面白いことに遙か下の方にキリストが日本で選んだ十二弟子の墓標もある。我々にとってこれ等は一伝説に過ぎないと思われるが、考古学的に言語学的にまた人類学的にこれが相当根拠あるものとして一部の人々の研究対象となっていることは興味がある。一例をとるなら我国の東北民謡集にもものっているこの地方に古くから伝わる民謡をロ

スアンゼルスの牧師川守田神学博士は、現地に行つて調査の結果これは立派なヘブライ語の讚美歌であるとして訳している。

かつてアイヴィンズ副管長は系図の大会で今日、日本の一部の学生が日本人はイスラエルの血統であると主張して居るが、そうであるかも知れないと言われたが我々は上述の神代秘史と耶蘇伝を聖書とモルモン経に对照して見ると面白い。モルモン経ニフアイ

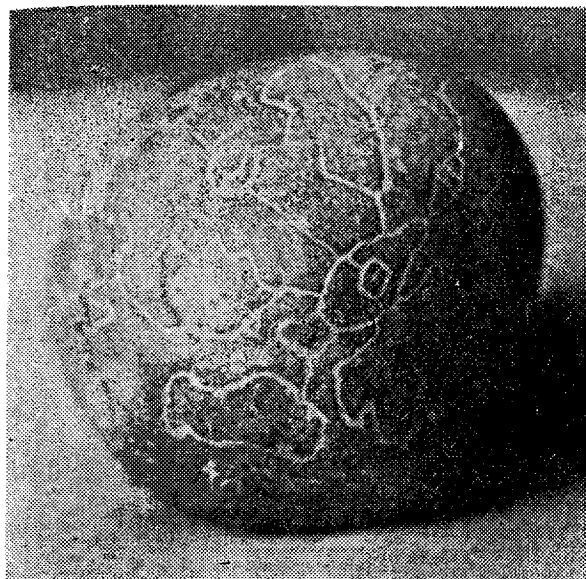
第三書八章五節にイエスは第三十四年一月四日に十字架にかかったと記され、復活してアメリカに現れたイエスは次のように言っている。

まことに、まことに汝らに告ぐ、われはこの地にも在らず、エルサレムの地にも在らずまたわれがこれまでに行きて教え導きし地の近所にも在らざるほかの羊を有つ。その羊はいまだわが声を聞きたることもなく、われ



竹内巨磨氏の作製せる系図

一この系図によると神武天皇は98代目の天皇であり、今上天皇は第222代目の天皇ということになる一



世界地図の刻まれた神体



同左の裏面に刻まれた神代文字

がかれらに現われしこともなし。されど、ついにただ一つの群とただ一つの牧者のみあるに至るために、われがこの羊にも行きて、かれらがわが声を聞き、わが羊の中に数えらるるようにせよとの命を御父より受けたるによりて、われは行きてかれらに現われん。

前述耶蘇伝の三十四才で大平洋を渡って渡来したことに符合するのである。

また我々は旧約聖書でイスラエル王国は紀元前七百二十一年にアッシリヤによって亡ぼされたがその後間もなく北方へ散乱したことを学んでいるが系図のテキスト、家督権の祝福にはルベンとカドとマナセの一部はコーカサスから東方へ進路をとりトルキスタン、新疆外蒙を経て遠く支那へ至っていると記されている。上述の神代秘史系図を見ると神武天皇の数十代前には旧約聖書にあるようないろいろな人名が出て来るが皇紀と西歴の差違が六百六十年であるからイスラエルの散乱西紀前七百年は年代的に日本の民族学（ウラル、アルタイのツングース系統としてパミール地方より渡来した）と符合して来る。なお或一部の言語学者は言語学的に日本民族がイスラエルの血統であることを証拠づけているがその一つとして日本人は天皇のことを、すめらみか

ど、と言うがそれはスメル文化と上述の東方へ散乱したカドから来たものでありジャンパンはカドの子供のジエボンから来していると主張している。とにかくどの程度伝説でどの程度史実であるか我々には不明であるが次の聖句を合せ読む時我々に正しい我々の先祖探求を挑戦しているものではなからうか。

かくのごとくにして、ユダヤ人はついにニーフアイ人の書きし言葉を得、ニーフアイ人はユダヤ人の書きし言葉を得、ニーフアイ人とユダヤ人とはイスラエルの家の中の失われたる支族の書きし言葉を得、イスラエルの家の中の失われたる支族は、ニーフアイ人の言葉も、ユダヤ人の言葉も得べし（モルモン経）、北の国々に在る者たちは主の前に主を憶えて出て来る（教義と聖約）。

イスラエルの民を北の地とその凡て逐ひやられし地より導き出せしエホバは活くといふ日きたらん（旧約、エレミヤ記）。

☆ ☆ ☆
★ ★ ★
☆ ☆ ☆



日常生活と神の教え

神崎良太郎

(東京北支部)

私たちが日常生活を教会と別個にしている時、あるいは世の人と深く交わったりまた信仰が弱まったりしている時には私たちは世の誠命が、私たちに真の幸福を与えてくださる神の教え、神の誠命に先行し大切であると思ひ込まれることがあります。

私たちは各々の立場、環境の中にあって生活の大部分を一般の世の人々と共に送っています。その生活の中にあって世の人の言動が、天父なる神の教えと一致する場合は問題がありませんが逆行する場合、私たちはしばしば当惑します。私たちは常に現実の中に住んでおりますから、そんな時は特に「現実」と言うものが絶対的な力を有すると思ひ込んで

世の誠命に屈服しがちです。しかしながら、神が私たちに投げかける細い一本のつなを頼りに人生を送る様に努力し、それを手離すまいと思うのに「現実」と言ういやに魔力のあるものが私たちをそのつなから一生懸命、あの手、この手を使って引き離そうとします。

確かに私たちはいついかなる時も今の今、現実の中に住んでおりますから、上ばかり見て足下に注意しないなら、多分つまづくことになりましょう。決して現実を無視すべきではないと思います。

がよく考えて見たいのです、本当に「現実」というものが「最高の力」を有するものかどうか。私たちが神の全ての教え、誠命に忠実たらんとして現実と衝突が起り、身動きがとれぬ様になって苦しむ事がありますが、本当に神の教えに忠実であって現実の生活がなりたくなり不幸になるというようなことが実際にあるのでしょうか。私は神を信頼しますし神の御言葉を信じます。本当に神の御前を離れてはいかなる

幸福もあり得ない。現実を一步乗り込めて信仰の目を開き、辛棒強く人生を歩む時、人はより幸福になれると信じています。

まだ社会を良く知らず、従って現実の世の中で生き抜いていくことの難しさを知らぬ私の考えは、甘ったるくって多分に若気の浅はかさを示していきましょう。

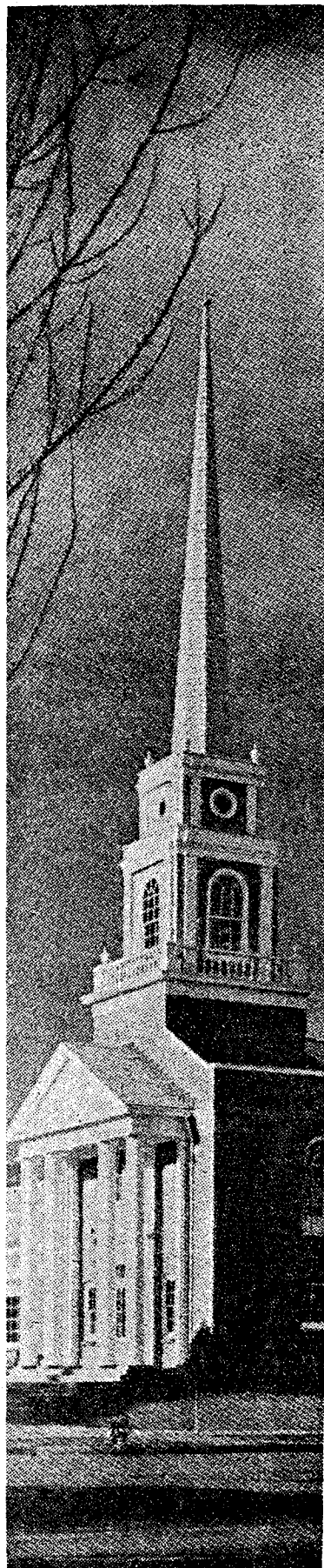
それでも私は次の事は、はっきり言えます。神の教えを生活の原則として信仰堅固に生きてこそ、現世に於ても本当の喜び、幸福を得ることが出来、そして末世に於ては神と共に住う最高の幸福を得る機会に与っているのだ。

最後に私たちは神の教えを知らなかったり、よく理解しなかったりして失敗や罪を犯すことがありますから、心して神の教えのなんたるかを勉強すべきだと言う事を申上げて私の話を終りにいたします。

全てをイエス・キリストの御名を通して申し上げました。アーメン

(学生 21才)

ともに考えよう



「己の如く汝の隣りを愛すべし」という誠命の

理解について

福田 正勝

(東京北支部)

私は多くの方々のすばらしい靈感にあふれたお話をきいたり読んだりする機会を与えていただいております、今さら私ごときの貧しい感動を書きつづるまでもないようにも考えられるではありませんが、やはり自分にとっては自分なりに「己の如く汝の隣りを愛すべし」ということは、次のことを意味するという、モルモンの一青年としての赤裸々な感動を書きしるすことも、意義あるのではなからうかと考えました。各人各様に感受性も経験も異

るのであれば、信仰のあつい、うすい、そして種々なる状態のあることは、ごくあたりまえなこととなります。アンチクリストであったニーチェは、虚無を克服するために、虚無に徹するという手段をとり、永遠回帰という思想によって、絶望感というものを、どうにもならないところにまでおいこんでしまい、ついに発狂することによって、彼は解放されなかったといえましょう。そしてニーチェの絶望というものを分析してみると、いわ

ゆる世的なものに多くの世の人々が感じている絶望とは異なるのであって、また世の人々は、ニーチェと逆に、真に絶望すべきことに絶望していないという誤ちをおかしており、そのことのうちにこそ絶望を見出さねばならないはずなのですが、そこにまで達するといふことがなかなか困難なようです。されどニーチェの絶望は、自分というものを神よりきりはなしてしまい、故意に自分の中にだけとじこもってしまうという、いかなれば、悪

魔的絶望、どうしようもない絶望といえるのではないだろうか。しかし、これは被造物としてあまりにも高慢なへりくだるをしらぬ態度であるといわれてもしかたがないのではないだろうか。同じく偽装的なキリスト教というものに反対した実存哲学者として、ニーチエとよく比較される人にキエルケゴールがいます。彼は、ニヒルを克服するのに、絶望と信仰というものをぎりぎりのところまで対決させていって、神の前に於ける人の無に等しきを、へりくだりみとめるということにより、信仰をえらびとり、信仰というものを通して、虚無を超越したのでありました。いずれの立場がより賢明であるかというのは、個人個人によって意見も当然わかれると思うが私は、キエルケゴールの立場を支持いたします。もっと身近かなところの私たちの家庭に於て、子供が親におこられたことを、いつまでもすねていたりしたとしたら、当然子供がよくないということになるはずです。子供として素直でなくてわるいということをよくよくわかっていながら、それにもかかわらず親にあやまるというこの出来ないような自分をみいだすとき、深い悲しみにとざされます。自分自身というものをみつめるとき、あ

まりにも欠点多く不完全故に、自分に対して絶望を感じざるをえないと思うのです。自分のためだけに生きようとしたら、生きる希望を失ってしまうことでありましょう。もし神の愛にはげまされるのでなければ、どうして生きる希望を持つことが出来るだろうか。たしかに自分に対して祝福を求めたりする何の資格をも主張出来ないばかりか、いかに多くの罰を受けねばならなくとも、当然であると認めねばならないような状態です。自分の罪というものに対して、主の贖罪というものがないとしたら、少しでも多くの罰を与え給えとしか言う言葉はありませんでしょう。

そこで私は、謙遜になって心をひらき、主の愛に深く感謝し、みゆるしを乞い、み助けを求めてこそ生きべきであります。神は私たちを心より愛して下さいます。それ故に、その大いなる愛に感謝しおこたえるべくつとむべきであると思います。両親の自分に対する愛というものを考えると、本当にそこには、あたかも子の為にしか生きていないような、己というものをなくした、真の愛の尊さというものに接し、深い感謝を抱かざるをえなくなります。親は子がよき人となることをのみ強く強くねがっていて下さるように

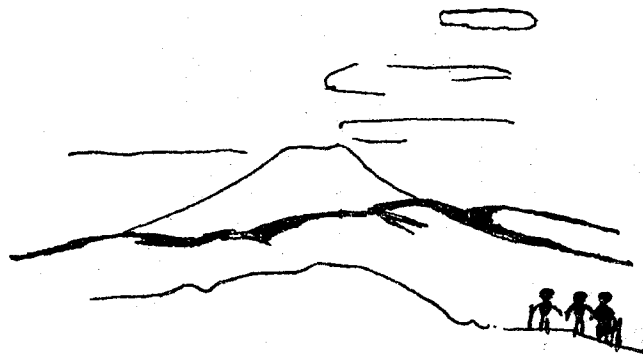
思います。もし私が人間的にあしくなるとき、両親は本当に深く悲しまれると思うのです。両親を悲しませてよいであろうか。決して否である。そうであるなら両親よりも、もっと純粹に、そして深く愛し給う創造主様に対しては、どんなにか深く感謝し、少しでも多くの幸福を完全を与えて下さろうとしていて下さるその愛に、そして私の上に与えていただいている大きな期待をどうしてうらぎってよいであろうか。決して否である。ここでもっと自分の身になぞらえて、自分にも子供が与えられたとしたら、どうして、彼らの幸福と完全とをどんなにかねがい、彼らの祝福を心よりねがわずにいられるであろうかということを考えてみました。もし自分の子供が悪しき道にいつてしまふとしたら、どんなにか深く悲しむかわかりません。霊の兄弟姉妹である方々を自分の子供として主よりおあずかりしたのに、彼らをまた主のみもとにかえることの出来るようにと、助けることが出来なかったとしたら、親としてこれにまさる悲しみを考えられるであろうか。不完全な人間でさえ、我が子であるということにより、まちがい多く、そしてすぐ悪にだまされまけてしまうような子供でも、彼らが、やけになっ

てしまつて惡に全て自分というものをうりわたしてしまふようなことをせず、いかに惡にまけても、七転八起というように、少しでも惡に勝つて与えられてゐる両親をして主、人々の愛と親切にむくいようとして努力しているとしたら、彼らのその努力を、どんなにか深い愛と助けをもつて、みまもり勵し、祈りをもつて助けてくれないといえるであらうか。それであるならまして、完全であられる創造主様は、弱き私たち被造物に対しても、もし私たちが謙遜になつて努力していこうとするかぎり、かならずや助けみまもり下さらないというようなことは、とても考えられないことです。考えてみれば有害無益にすぎないばかりか、惡に勝とうと努力しても、結果としては本當に微々たる状態しかせいかがあがらぬばかりか、自らの愚かさで失敗ばかりがあまりにも氣ずき、ややもすると絶望におちいりがちになりますが、ここに於てこそ、私は信仰をいだき、主の愛に信頼して、主の愛、他よりの恩恵というものに対して真に認識することをおして、困難に立ちむかつてゆくべきであると考えます。もし、自分自身で深くそれらを認識しないのであれば、他がどんなに祈り心をもて助けて下さろうとし

て、幸福をねがってくれたとしても、自分というものに対しては、どうすることも出来ないであります。言いかえれば、惡えといふ人を、その人の爲になんとかして思いとどまるようにと、どんなに真剣になつてすすめても、人間には自由意志を与えられている以上、その人自身が真にわかり納得して、愛というものの認識に真底より達しないかぎり、はたからは、決定的なことをしてあげることは出来ないのです。眞の認識の上に立つて、親の身になり、子供であるときはよき子供となるようにつとめ、主のその切々たる愛を思い、主の身になつて、一被造物として最善をつくし、子供を与えられていない立場の人は、自分に子供を与えられたときのことを思い正しく生きるようにつとめるべきであると思うのです。とりもなおさずそのようにすることこそ、「己の如くに汝の隣りを愛すべし」という眞の解釈のありかたではないだろうかと考えました。モルモンの一青年が、或る日考えたこととして、少しは参考になるかもしれません。私は、かくして、本當に自身に対してあまりにもなさけなくなるような状態の日々ではありましようが、主の愛に支えられて、少しでもみ心になえるように

との絶えざる願い、祈りをもつて、絶望より立ちあがり、神権の大きな力にささえられ完全の努力を日々刻々させていただいています。

(会社員 22才)



眞の神様を知って

青木サダ

(松本支部)

私はモルモン宣教師の愛のみちびきによって眞の神様を知ることが出来、今日あることを悦び造り主を見出して始めてみたされる悦びに日夜を過ごさせていただいて居ります。

私は昨年の三月神様のこの地上での最大の試験にあいました。私はもとある教会の会員でありました。母も若い時からの会員でありました。そして私の家は遠く教会からはなれて居りましたので、本部から伝導師が見えて月二回伝導集会を開いて居りました。いつも二十人くらいの求道者と共に聖書の教えを学んで居りました。そして神様の道を深く知れば知る程、もっと靈的に深いものを求めて探求してやみませんでした。それでのこされた人生を神様にささげて参りたく思い、きえ行く栄を捨て、天国に永遠の宝をつむべく財産をまとめて教会を唯一のたよりに松本へ参り

ました。

けれども私の想像とはあまりにもかけはなれ、この地上では眞実を求めても眞実は得られず、いかに自分は眞実に生きようとしても生きられず、すべてはこの世の事業であり、「愛なくばなるかねやねうはちの如し」を知った悲しさに打ひしがれました。けれども私は信仰を捨てず心して教会にはげんで居りましたが、ついに私の力のたよりなさ、また人間の弱さにまけて精神的にも肉体的にも大きなショックを受けてついに病にたおれました。一年間悲しみのどん底に落ち入りました。その時に不思議な神様のみちびきでモルモンの宣教師の家庭訪問を受け、眞実に、また自分に忠実に生きられるのはこの道だけであることのさとりを得、きよき神の愛によってみちびかれたすばらしい救の教義、それは今ま

でに学んだことのない教でした。眞に生き給う神の奥義にひとやにとちこめられて居りました弱い罪人のたましいも、力強い神権の鍵でときはなされ、罪はゆるされてバプテスマをこの七月三日、松本支部のアンダウツド長老とホートン長老によって受けさせていただきました。

そして愛なる神様は私の今日あるための備えに、さらに一段と高い恵を与えんが為に、大いなる試験を与え給うたことをさとることが出来ました。今までわざわいと思ったことすべてが恵みであり、この末日に眞の神様を知ったこと、そうして眞の神様の永遠の御事業にたづさわらせていただけることは、私の長い過去の人生がマイナスではなくすべてはプラスであつたと思っています。

そして創造主の大いなる御計画、広大無への御恩寵にただただ感激し、愛なる神様の智慧と知識がいかに深いかたと、日夜讃美と感謝をささげて居ります。この世の宝はすべてなくなりましたが、不思議にも住む家だけが備えられ、毎日を眞の神様に連なった楽しい日を過して居ります。

(主婦 59才)

最近私が非常に安心していることを思わずにはい

益のために永遠を失うようなおろかなことをした

たことがございます。それは先日系図委員の方々のご努力のおかげで、系図の一部提出を終えたこととでございます。これ

で、忘くなつた私の主人も救いの門をくぐることで

きるのです。おろかな戦争によりまして、私は最愛の夫をうしない、本

当にぼう然といたしました。が、神のおみちびきで私はふたたび主人にめぐりあう機会を与えられました。

どの教会にもないこの救いのめぐみを思う時、私は自分がなみなみでない神のみ愛を受けて

いることを思わずにはい

益のために永遠を失うようなおろかなことをした

永久の喜びを得、お互いに愛しつつ、永遠に神を讃美しつづけることで

ひとつの安心

高橋 ちよの

(仙台支部)

の世の生活は、この永遠す。選ばれてこのめぐみのしあわせを得るための

を受けることができる

ものであり、いうなれば

は、なんとという大きい喜びの宿というものです。

主

巨万の財宝を積んでも、

ひとたび生命を失えば、

いるかと思ひますと、私

なんの価値がありまし

うか。私どもは瞬間の利

得ることが出来ます。私

どもはともに祝福されて

永遠の喜びを得、お互

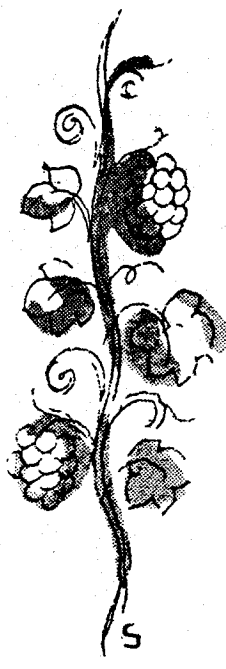
に愛しつつ、永遠に神を

私は今日

バプテスマを受けます

青木喜久雄

(東京中央支部)



みなさん、今日は、私は青木です。私が主イエス・キリストについて知りたいと思ったのは、それほど、急なものではありませんでした。

それはごく自然に知ってきました。というのは、私が病氣以外の苦しみ、心の苦しみにあうようになってきたからです。

私の場合ですと、小学校・中学校時代は遊んで、勉強して親のすねをかじっていたので何の苦勞もありませんでした。ところが、高校に入るとすべてを自分でしなければならなくなりました。

この時から生活苦への悩みがはじまりました。その苦しみの中に、キリストについ

て書かれている聖書を何気なく買っておいたのを読み始めました。それ以後、たえず聖書を読むようになりました。聖書を読んで最もよく気づくことは、その言葉が非常に重々しく、心の底まで、つらぬくように思われるのにあります。

そして普通の書物、どんな書物でも、えられない、非常に大きな権威をもって

語られているということです。聖書を読んでいると、他のどんな文学書も影が薄くなってくるように思われます。他の書物を読む気がしなくなります。そして聖書の言葉が真理であることに気づくのであります。

聖書の中に、よく主が、我々人類に語られる言葉の中に「まことに、まことに、汝らにつぐ」という言葉がありますが、この短い言葉の中に、すでに主が愛であり、光であるという言葉の真理を見いだすことが、出来るのではないかと思えます。

私はクラスで授業時間中に四人の人たちと論争したことがあります。その論争の題は、宗

教のことと地がある事実についてでありました。その人たちはだいたい次のように言います。宗教というものは、人間の精神的、肉体的弱点を補うために必要であって、それによって安心を得るのであるから、どんな宗教を信じてもよいと言うのです。

地がここにあることについて、天体があることについて、それらの法則性のあることについて、問いますと、これらの天体、地、法則性は、自然に出来たと主張してゆずりませんでした。

これらの主張について、私は次のように主張しました。宗教はどんなものでもよいと言われましたが、そんなことは、決してないはずであります。世界の主な宗教の創始者を見ますと、回教のマホメット、仏教のシャカ、これらの人は商人であり、貴族の者であり。キリストのような、もっとも秀ぐれた教えも奇跡もない。キリスト以外に、信すべき方はおられないこと、キリストは真に我ら人類のために降誕されたことを話しました。

天体は決して自然に出来たものでないこと、これらはみな結果が目の前にあるのであって、原因もまたかならずあること、すなわち、造物主があること、それは神であり、第

(三一四頁へ続く)

オッペンハイマー博士の講演を聞いて

山 田 政 伯

(聖徒の道編集部員)

人類に対して最初の原爆が投下されてから、今年で十五年目。そして、今年も広島島の祈りを平和の誓いとして、原爆記念日の平和宣言は訴えています。

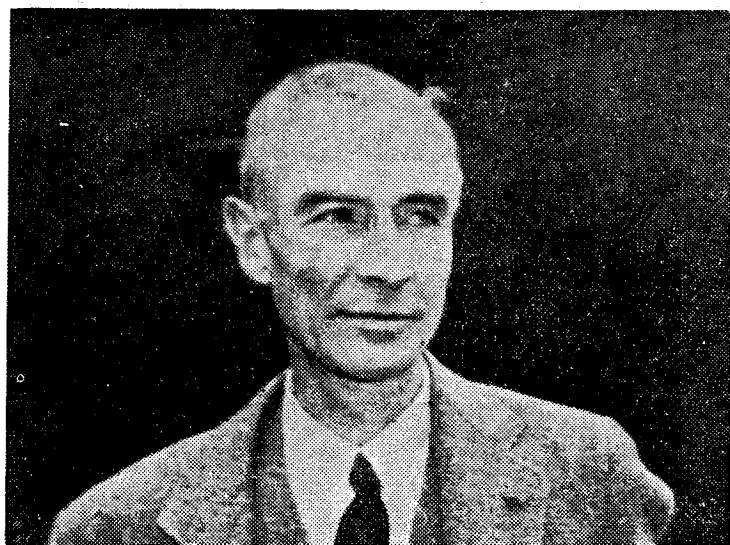
われわれはすべての民族、すべての国家が、人類連帯の精神に立って小異をすて、大同につき、核兵器の禁止と戦争の完全放棄をなし遂げ、共存共栄のための新しい世界秩序を打ち立てることこそ喫緊の要務であることを確信する。本日、こゝに思い出も新たに原爆死没者の霊をとむらうにあたり、重ねて世界に宣言する。(抜粋)

去る九月五日、来日されたアメリカの物理学者ロバート・オッペンハイマー博士(現在、プリンストン高等学術研究所の所長)は原爆第一号の生みの親なのですが、無数の生命を失った広島の一瞬を祈って——科学者たちは罪悪を知ったのだ——と強く反省し、トルーマン大統領時代には水爆製造に反対しました。そして博士の進歩的信条がマッカーシズムの激しい攻撃を受け、原子科学者として苦悩しました。また博士は、宇宙線観測中に発見された新粒子が湯川博士が理論的に予想した中間子であることを指摘する等、アメリカの理論物理学界の第一人者です。

この度の来日は知的交流日本委員会の招きで、日本の科学者と交歓することが目的ですが、幸いにも九日夜、東京麻布の東洋英和女学院で行った「科学と文明」と題する講演を聴くことができました。博士の厳しい、現代文明に対する観察と批判を紹介してみたいと思います。しかし、文化全般にわたって中広く語られたので、要旨をまとめてみるだけでもむづかしく思います。(従って、僕と、僕の友人のメモをツナギ合わせながら、その中心点だけを書いてみます。立教大学教授豊田利幸氏の要約を参考にしました。)

まず、科学と道徳の関連について、「自然科学には、真理の探求発見と私たちの生活を向上させる技術開発の二つの機能がある。そして科学の進歩は、すでに明らかにされていることに、新しいことをつけ加えながら進歩していくものであり、ふたゝび元には帰らない。獲得されたものは、必ず一つの方角を指して進む。つまり科学の進歩は不可逆的課程である。」しかしそれに反して、我々の道徳の進歩はどうだろうか、誰しも考えますが、「科学はインターナショナルな性格をもつが、文化はそうでない。文化は経済や政治、風土等の違い、伝統の相異を含んでい

一時の課題一



る。科学の発達する原因は人間の反省とあくことのない好奇心によるものである。科学の進歩は十年ごとにその知識量は倍増していくほどであり、従って「昔は、閉ざされた世界」であったが、現在は「開かれた世界」である。しかし、そのために、かえって調和と秩序が保ちにくい困難があります。「科学者の進む道には二つある。一つはより深く、より完全な知識を求める努力を続けることであり、もう一つは、浅くてもより広く理解することである」いうまでもなく科学を確実なものとして進めていくには、前者を選ぶ以外にありません。その結果各専門分野ごとに、枝がこまかに分化してゆくことが「科学の伝統」なのであります。「我々物理学者はお互いに、よく交流して、知りあい、理解してお互いの発見を共通のよろこびとして持つており、このことが物理学を統一の方向に進めているのである」単に物理学だけでなく、すべての分野にまで「このこと」を広げていくならば、世界も統一の方向に進むと思います。また科学における大発見は、我々の世界観を深めるのに非常に役立っています。たとえば「ニュートンは重力の法則を発見することによって、我々の日常生活に大きな影響を与

え、ダーウィンは、ご存知の様に我々の考え方に非常に大きな影響を与えた」。

アインシュタインはかつて「科学は事実によって決定されるものではなくて、人間の自由な心の働きによって作られるものである」と云いました。これは沢山の問題を提起している言葉です。その一つとして『客観性』をどう考えたいか。真理をどう考えるかという問題があります、考えてみましょう。

「我々は個人としてではなく、人間として伝統と実践において制約されている。しかし自然のどこをみるか、どのようにみるか、どのような装置でみるかは自由である。だがその結果得られたものについては自由ではない」とデュロイは云いましたが、確かにそうです。たとえば質量という概念の研究は自由になされましたが、中性微子の質量がゼロであるということは、もはや動かすことができない事実です。また、電子にマイナスの電荷をつけるという発明も自由でありましたが、動かすことのできない現実として、物質を構成するには、マイナスの電荷を持つものでなければならぬことがはっきりしています。この様に現実が、自由を制限していきま

す。「我々の行動は、つねにいくつかの選択

のなかから一つを選びとっていくものである。ですから、選んだつもりでいても、時には落してしまってしまう大切なものがあるのです。このことに注意せねばなりません。「それゆえに科学に於ては『すべて』とか『絶対』とかいう命題はあり得ない。むしろ客観的であるということは、明晰さをもって、あいまいなものを除き、有効なものだけを、説明していくことである。我々の捜し求めているものは単なる雑多な知識ではなく、調和と秩序のある知識である」。現代のようにマス・カルチュア（大衆文化）の発達した時代では、ともすると、精神的に貧しいものが、のさばって、すぐれたものが、陰をヒソめています。こゝに現代の病理があるのではないか」と思います。こうした時代の科学者の任務は、精神の貧困と人間同志の分派抗争を防ぐことにあると思います。人間の正義感、徳、相互信頼を回復するために人間としての明るい習慣を築いていかねばなりません。そのために、世界の人々はもっと理解しあって、「よろこびのための共通の言葉」ととりもどそうではありませんか。

結論として僕が感じましたことは『科学によって証明されないものはすべて存在しない

とか、確認できないものは存在しないとか、そういうことを科学の名に於て、あるいは科学の支持を援用して主張するならば、それはとんでもない言い過ぎであり、言い間違いであるのではないか。そういう意味で唯物論、無神論がこの百年以上の間にわたって人類を支配してきましたところに、あるいは、現代の科学の高度な進歩と、これに對し人間の人間性あるいは道徳性の不進歩とのギャップすなわち、間隙が生じているのではないかと思ひます。現在に於て、我々のつとむべきことは、科学の進歩をおくらせることなく、人間性あるいは人間の道徳性の進歩を促す』ということだろうと心から思うのです。

ついに、月をとらえた、ロケットの発達は、軍事技術の発達を伴っています。平和の使命が「戦争のために創り出された新しい兵器が、平和に有利な圧力を加えはじめていく」という弁証法を生みだしているのです。今ほど平和の問題が切実に迫っていることはありません。博士の——共通の言葉——をとり戻そうという訴えに、僕達も耳を傾けてみようではありませんか。

（筆者はフジテレビ記者）

（三一頁より続く）

一の原因は、神に帰せられるべきであることを話しました。

天体やその法則性が、決して自然には、出来ないこと、最近来日された、ジョウ・ガモフ氏の言われる天体は、無限に小さいものが、無限に大きくなったと言われましたが、決してそうではないことを主張しました。よく人は何を信じてよいという人が、おられますが、決してそうあってはならないと思ひます。

この論争があつて、何日かたつてから、クラスの中に、キリストを信ずる人がいました。その人が、エビスで紙きれを貰ったから行かないかとさそいました。私はこの日の来るのを待っていました。なぜならば、一人で教会へ行くのは、はずかしいからでした。夏休み前の七月二十一日に始めて、この教会に来ることが出来ました。

この教会に来て始めて気づいたことは、非常に、なごやかな雰囲気であることでした。どこの教会にも見られないような楽しい雰囲気でした。さてここにおいて、私を導いて下さいました宣教師であられる、メリヨ・岡畑姉妹、ジョイ・アポ姉妹に心から感謝いたします。

主イエス・キリストが我らの救い主であること、モルモン経が神の言葉であること、ジョセフ・スミス氏が、まことに主の予言者であること、この教会がまことに、主の教会であることを心から信じます。

これらをすべて主イエス・キリストを通してお話しました。アーメン（学生19才）

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹 (十)

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部 時満ちたる神権時代の開始

第七章 示 現 (千八百二十年)

六、ジョセフ・スミスの感想。 「満十四才を少し超え

たような一介かいの少年であり、またその日の労働でようやく生計を得て行かねばならぬ運命に置かれた一少年の私が當時最も評判の教派に属する偉い方々の目を惹くほどの、また言わば、最もひどい迫害と悪口雑言どうごんをあげせようとする精神を彼らの心中に引き起すほどの重要な人物と思われるようとはいかにも不思議である、ということとは当時私を本気に深く考えさせまたそれ以来しばしば深く考えていることである。しかし不思議であろうがなからうが事実は迫害と悪口雑言どうごんであった。そしてこのことは度々私自身にとって非常な悲しみの種となった。然しながら、これにも関ら

ず、私がさきに示現を受けたことは事実である。あの時以来私は、パウロがアグリッパ王の面前に於て弁明し、彼が先に光を見声を聞いた示現てんまうの顛末を語った際、なお彼の言を信じた者がほとんどなく、ある者は彼は偽りを語ると言い、他の者はかれは狂えりと言った。そして彼が嘲り笑われ悪口雑言どうごんを受けたその時と自分は大へん似た心境であったと思っている。しかしながら、すべてこれらの反対も、パウロが示現を得たという現実を打ち破らなかつた。パウロは、先に示現を受けた。彼はこれを受けたと言う事実を身を以て知った。そして天下のあらゆる迫害もこれを変えることができなかった。人がかれを死ぬまで迫害しようとも彼は知っていた。彼は最後の一息まで、彼が光を見、彼に呼びかける声を聞いたこの二つの事実を知っているであろう。事実、全世界も彼の考えを変え信ずるところを変えさせることはできなかった。

「私も正にその通りであった。私は実際に光を見た。その光の唯中に二人の御方を見た。そしてその方々は真実私にお言葉をかけたもうた。私が示現を受けたと言うために憎まれまた迫害せられても、なおそれは真実である。そして私がこのように言うために、人々が私を迫害し罵り偽ってあらゆる悪口をあびせている間に、私は自分の胸の中で語るようになった。」

『何故真実のことを話すから私を迫害するのか。私は本当に示現を受けたのだ、私がどうして神に抗えようか。何故世の中の人は、私が本当に見たものを見ないと言わせようと思うのか。私は示現を受けたのであるからそれが事実であるのを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことができなかった。また敢て打ち消そうともしなかった。私は少くとも、本当にあったことを打ち消すならば神の怒りを受けて罪の宣告を受けることを知っている』と。

「私は今や教派社会に関する限りすでに心に満足を得た。すなわち、私はどの教派に属する義務もなく、おって神のお示しがあるまでこのままつづけて行けばよかったのである。私はヤコブの証が真実であることを悟った。すなわち『智慧に欠くる者あらば神に願うべし。然らば与えられ、然も咎めを受けざる』ことを」。

七、ジョセフ・スミスの大きな名譽。

天父と御子の御

二方が肉身を有っている人間の目の前に栄光の中に現われたもうたということは、現在世の中にある歴史や啓示の中にいまだかつて誌されていない。この素ぼくな少年に与えられた名譽は最も驚嘆すべき大きな名譽であった。彼の信仰は実に偉大であった、すなわち彼がジェレドの兄弟のようにこの世の覆いを貫いてこれら聖なる御二方の栄光を見ることができ、その御二方の栄光が彼の上に留るほどその信仰は大きかった。彼を覆っているこの能力がなかったなら、彼はこの御二方の前に出るに堪えなかったであろう。この御二方の輝きは真昼の太陽の輝きよりもはるかにすぐれていたからである。それであるから、この偉大な示現が見えたのは肉眼の力によるのではなくて、靈の視力の助けによるのであった。肉身を有っている人は、主の有ちたもう能力にある救いの恵みがなかったら、このように主が目の前に在すことを見得ないであろう、その人は燃え尽きてしまふからである。ジョセフ・スミスは主の御能力によって、偉大な創り主と神の栄光を受けたもうたその御子とが目の前に在すのを見ることができた。それはこの御二方がジョセフ・スミスに現われて言葉を交える名譽を受けることを許したもうたからである。

・八、もはや天は封じられていない。天はもはや真鍮のように固く閉ざれてはいなかった。もはや人間は暗黒の中でやむを得ずつまずいたり手探りしたりしなかったであ

ろう。救いは世の人に告げ知らされ、喜びの便りは大きなラッパの響きによるように地球の果てにまで鳴りわたったからである。サタンの統治は終りに近づき、永遠の平和を告げる便りは間もなくあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国言葉の民およびあらゆる人々に間もなく宣べ伝えられるはずであった。

九、世人はかの示現を否定した。　ジョセフ・スミスが喜んだのは少しも不思議ではない。彼は今や世界中に居るすべての教師や牧師たちよりもっと偉大な知識を有っているのではない。当然彼はほかの人たちにも彼の喜びを分け与えて、彼の有^もっている驚嘆すべき知識を共に持たせたいと思った。彼がほかの人たちに喜んでその知識を宣べ伝えるなら、確かにほかの人たちは喜んでそれを受け入れて彼と共にうれしく思うことであろう。しかし、大きな失望が彼を待っていた。それは世人が一致して彼の伝える言葉を受け入れなかったからである。それを信ずる心があったのは彼の家族の人たちだけであった。彼は一介^{かい}の少年にすぎなかったとは言え、学問のある偉い人々から輕蔑^{けいべつ}の念を以て取り扱かわれた。彼は嘲けり笑われ辱しめを受けた。彼はこの輝やかしい真理の言葉を知らせて愛と感謝の精神を受ける代りに、侮辱と憎悪の精神と争わねばならなかった。彼は悲しみながらも、心の平安を保って待つことを知った。それは先に約束を受けたように更に光明と靈感とを授

かるのを待つことであつた。すべて世の人が侮辱を与え以前友だちであつた者が嘲けらうとも、彼は示現を見たことを身を以て知っていた。彼がはげましと助けを得たいというへり下つた希望を抱いて、今御許に行つて身も霊も投げ出すことのできる一人の「友」がこの世にあつた。もし神の御子が彼のへり下つた訴えを聞いて下さるならば、全世界が彼を笑おうともそれは何でもないことであつた。

十、真理を伝える言葉が受け入れられなかったのは不思議でない。　なお、われわれが頭を静めてよく考えてみるときに、光明と真理とを伝えるこの言葉を世の人々が受け入れなかったのは少しも不思議ではない。それは主が長年前に「人間は彼らの行い悪しきが故に光明よりもむしろ暗黒を好む」と仰せになったからである。祭司らに就て言え、彼らの悪知恵は危険ではなかったか。天の神が年若い聖見者に託したもうた伝言は非常に烈しい言葉であつた。人間の造つた教義は神の福音に一致しないということとは、明らかに理解される言葉ですでに宣言されていた。これは当時の宗教々師たちの喜ぶ伝言ではなかった。更に、かの示現は各時代の言伝えを粉砕してしまつてゐた。多くの教会で教えた教義は断乎として反ばくされまた誤りであることが証明された。世の人々は正典はすでに完成されていて附け加えるべき所のないこと、これ以上啓示のあるはずが

＜求道者のためのよみもの＞

ユタ物語

(1)

リーヴァイ・エドガー・ヤング

(七十人会最高評議員会々長)



ユタの歴史はよい家庭物語である。人々は寛容で親切で非常に宗教的であり倫理的な考えによって彼らの行動を決定している。彼らは美しい山々、輝く日光、おどかな気候の影響を受けてアメリカの荒地を緑したる、畑地に、見事な果樹園にまた美しい都市の立ち並ぶ富める国としたのである。彼らは地中深く掘り下げて金、銀、銅及び鉄を豊富に取り出したのである。ユタの産業並びに社会的発展は儉約と土地を尊重する大きな教訓をもたらし、また人々は高度な彼らの英知を意識したのであった。この物語で我々はユタが如何にして偉大な州となったかを示そうと思う。

ユタは山脈や谷間や高原から成っている州である。ワサチ山脈が縦断して地理的に州を二分している。その西方のこうばいは大変に肥沃な地で引続く平野は南北に亘って大農場果樹園を成している。ワサチの東方は大高原で北はユインタ山脈によって限界をなしているが、このユインタ山脈はワサチ山脈と共に、ユタの地理的特徴を決定づけているのである。

ワサチの西方の水は大ソルトレーク(塩湖)に入り山脈の東方はコロラド河に注ぐ、ワサチ山脈から多くの美しい河川が流れ、その沿

岸に都市や町々が建てられたのである。ユタの大部分がアメリカの荒野であったにもかかわらず灌漑と開拓によってその土地は素晴らしい富を展開したのである。冬の降雪は山間に水源を確保し、夏に水を供給するのである。四季は明瞭に、寒い霜の冬の日が終ると、正確に暖い春そして夏が訪れるのである。

水の最大なるものはかつてワサチの全峡谷を覆っていた内海の名残り大ソルト・レーク（塩湖）である。それは長さ八五哩に幅約四〇哩である。そして四分の一の重量の塩分が溶解しているのである。州の南部に更に二つの割合に塩分のうすい湖があり、一つはリットルソルト・レーク（小塩湖）であり他の一つはシヴィヤである。ユタ湖は真水の最大な湖である。ヨルダン、プロヴオ、ウエバー、オグデン、シヴィヤ及びベヤ河はワサチ分水嶺から湖に流れ込む主な河川である。東部ユタはグリーンとコロラドである。

山々と谷間の介在はユタの地に変化を与え、天然資源を豊かにしている。谷間は美しく、偉大なる雪峰は山湖を守り、うっそうたる常盤木の間にはコラムバインやバラが一面に咲き乱れている。そしてこの大ソルト・レーク峡谷には千五百年からの種々の野生の植物が

生い茂っていると言われている。金、銀、銅鉄及び石炭は豊富で州発展の重要な要素をなしている。ネヴァダの方への西方は一大荒原地で目下開拓中であり年々開墾が進められている。

開拓期以前

ユタ開拓者たちが今日のユタ地域に入植した時、大シヨーションアン系に属するユテ及びパイユトの二種族を発見した。ユテは北方特に大ソルトレーク盆地に住み、パイユトはユタ南部及びアリゾナの北部に居住していた。

両種族とも小さな群をなして放浪し、その強大な指導者は、酋長であるタビ、ワシヤキエ、ウオルカー、及びアロパインであった。ウテは活潑な民族で正直で貞節である。山間に住むインデアンとしての特長を持つ彼らはこの大太平洋方面への入植者たちに対し友好的であり、しばしば山中や荒野を案内する為に案内者を派遣してくれたのである。

州の歴史によると、これらのインデアン人たちは、早期に於てスペイン人たちによって発見されたのであった。彼等は一五四〇年、最初にこのユタ地域に入った白人、カーデナ

スの時から知られている。スペイン人たちは、常にインデアン人たちに伝道しようとしていた。一七七六年にエスカラント及びドミンゲスと言う二人の勇敢なフランシスコ修道僧が、カリフォルニアへのカトリック伝道のよき道をつくる目的を以て、ワサチ山脈とユタ盆地を探索した。彼らはユタ湖の岸に数日間キャンプしてから全ユタを横断したのであった。

その時から開拓者が来る迄、スペイン人たちはワサチ山脈に来て原住民たちと交易をしていたのである。実際には彼らはよく原住民の子供たちを捕えてメキシコに奴隷として売っていたのである。早く一八二四年頃、ハドソン湾の猟師たちがこの山間地方に入りこんで来て、大ソルト・レーク東岸の今日、オグデンと呼ばれている処にその市場を設けたのであった。永久的な入植者たちの入る以前このユタ峡谷及盆地を知っていた最も有名な猟師兼探險家は、ピーター、スキン・オグデン、ウイリヤム・アシレイ、ジェームス・ベックウオールス、ジェームス・ブリッジャー及びジェデジャ・スミスであった。彼らは皆この西部の地理的特長に通じ、彼らの知識は、その後この地方に来た人々を大いに援

けたのであった。

一八四一年に有名なフランシスコの司祭であったカトリックのデスメット神父がユタの北部を横断してインディアン人に福音を説き、一八四三年にジョン・C・フレモントは小さなボートに乗って大ソルト・レーク内の小島に上って盆地に就ての記事を書いたが、それは政府によって出版された。一八四〇年から一八五〇年の十年間に数百の定住地を求める人々がオレゴン道に沿って広野を横断し、南方路は一八四四年の始めに大ソルト・レーク盆地に通じたのであった。この道を一八四四年にハーシングスを通り、一八四六年に悲運のドナー団がカリフォルニアへの途上、大ソルト・レークの南洋を通過し、冬期に団員の半数がスイエラスの雪で死滅したのである。

ユタ開拓者たち

一八四七年迄、ユタに永住移民はされなかった。その年モルモン開拓者の一部がイリノイス州から西方へ向って出発したのであった。その団員の一人が日記の中に次のように書いている。

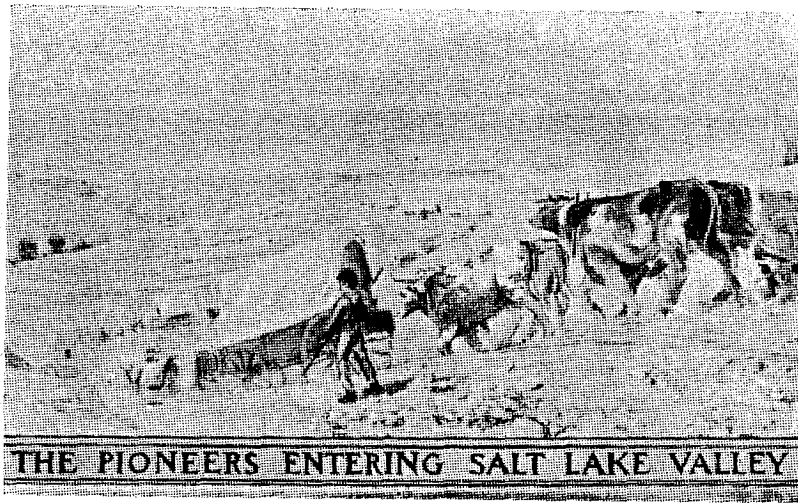
「この朝私は農場を売って現金百弗と、一台の幌馬車と、四頭の馬を手に入れた。私はこ

れを深く感謝した。明日私たちは私たちの持物を全部幌馬車に積んで馬をつけて、ミズーリ河に向う兄弟たちに加わる為にこの地を去るであろう。日は寒く、団員の内には病苦に悩まされている人々も居たが、私たちは神が私たちの導き手であることを知って居り、その御手の内に私たちの運命を委せて安んじて出発するのである」。

一八四六年から一八四七年にかけての冬にユタ入植者たちはミズーリ河畔のコンシル・ブラフス及びそこから七哩のウインター・クオーターに集結した。彼らの指導者、ブリガム・ヤングはその民をつれて西部へ行き、そこに土を得て家を建てようと決心した。ウインター・クオーターは活気ある町となり、市民社会が形成された。そこには学校や礼拝堂が建ち、人々の家屋はミズーリ河畔の丸木小屋に過ぎなかったが経済活動の中心地であり、製粉所や、製材所も持っていた。それは西部への開拓を目ざす千五百人の宗教に結ばれた一団の社会であった。当時、毛皮商人や猟師で、ウインター・クオーズを訪れた者は、そこに住む人々が非常に正直で、パウニー・インディアン人たちが彼らを自分たちの居住地に喜んで迎え入れていたと言っている。

最初の開拓団はブリガム・ヤングによって選ばれ、一八四七年の四月にウインター・クオーズを出発した。それは一四〇人から編成され、三人の女性と二人の子供をも含んでいた。その開拓団は将来彼らの落付くべき地を探し求めているのであった。ブリガム・ヤングは生れながらの指導者であった。偉大な個性の持主で、信仰深く誠実な人であった。彼は適材適処に用い完全に事を処置する偉大な人物であった。

この一団の者は優秀な社会を形成していた。何となれば、彼らは皆、律法と秩序に従順に従い、善良な生活をしていた。彼らはその編成に当って彼らの従うべき法則を定め、団体的行動をとったのであった。彼らはブラット河に沿うて、今日のワイオミンに向い南路を通過してフォート・ブリッジャーに來たのである。そこから彼らは大ソルト・レークへの道をとったのである。広野に在る間、彼らは勝手にバッファローを殺害しないこと、インディアンたちと問題を起さないことを命じたのであった。実際に於て彼らは始めからインディアン人と親しみ、食物を持っている時は、何時でも分け与えていたのである。彼らは組織的に秩序正しく、日々行進を続けた。



1947年7月24日開拓者たちはユタの地を始めて踏んだ。

毎朝五時のラッパで起床した。そして全員が朝の祈りに集合し、朝食をすませて、第二のラッパで行進を始めたのである。彼らは毎日、約二十哩旅を続けた。夜には彼らは火を囲んで歌を歌い、夜の祈りを終えてから夜警

を置いて、就寝したのである。毎安息日は厳重に守られた。一人の開拓者はその日記に次のように書いている。

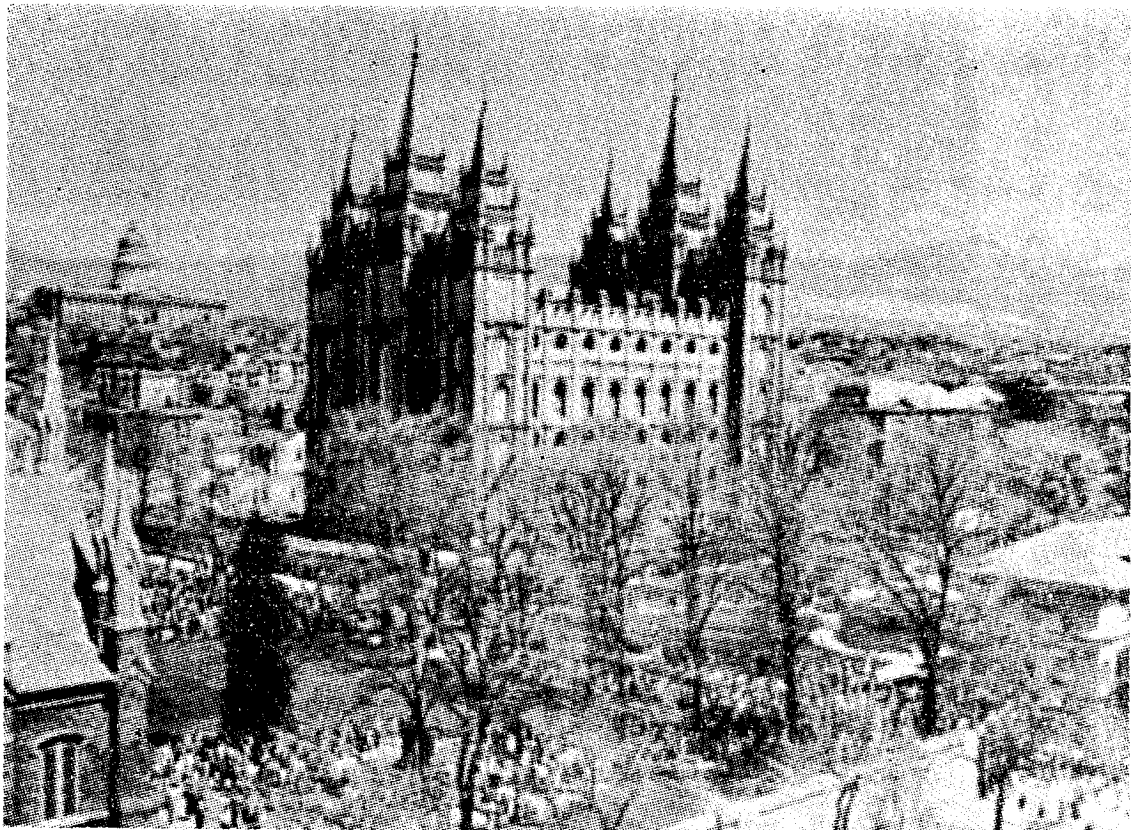
私たちは今日はひげをそって、きれいな服を着た。今日は安息日で私たちは美しい手と、清い心を以て神様に逢わなければならないからである。(続く)

☆

☆

☆

☆



みごとに建設されたソルト・レーク市

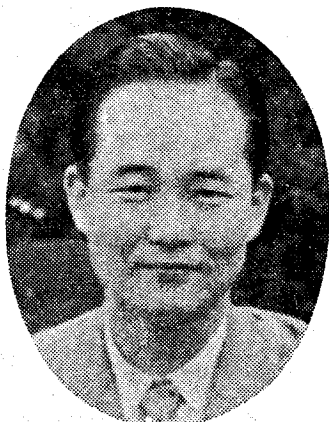
新しき歩みへの大会

喜びあふるゝその日

日本人による初めての

地方部長会組織される

今井一男地方部長



部長司会という異例事、またプログラムには「演説者指名」と記されているだけで、例年のように説教者が明記されていなかったこと等、何か、特別発表を予期してはいたが、——日本人による地方部長会が組織された——ことを聞いて会場にうれしいザワメキが起きた。

十月二日、虎の門の日消ホールで東中央地方部秋季大会が開かれ、九時から神権会扶助協会が行なわれその後、一般大会が開かれた。

秋晴れの素晴らしい天気、朝、絶好の大会日和に恵まれた中に一般大会、午前の部は午前十時半アンドラス伝道部長の司会で開会され、画期的な発表があった。それは伝道

師等を経験された田中英男兄弟の三人が支持された。

そのあと、この七人の新しい指導者と、オートン前地方部長、テッド・プライス第一副伝道部長、バンドイク第二副伝道部長が、二時半からの午後の部との二回にわたって説教され、最後に伝道部長が——信仰は行なり——と強調されて、一般大会は午後四時十分閉会した。

この画期的な神の計画により、新しい地方部長になった今井一男兄弟は、これから建てられて行くべき新しい地方部の性格と方向と基礎について抱負を語った。

そして、「神が愛され、ジョセフ・スミスが愛されたように」この真実の教会に働き、「主が命じられ、開かれた道を一筋に歩みたい」と感動に頬を赤らめていた。

確かに「神の国を地上につくる」ことが、神が人類を導く指導原理であり、それが世界平和をつくる「基盤であるならば、今度のこの新地方部長会結成は、日本の将来に明るい輝きを持っている。キリストの末日観、その時の国際法

は愛」であり、十字架の福音がすべてを支配するのですが、日本の民族性、社会組織の他との相異を大切にして、「相異のままで人の心をつなぐ」努力をして、神の国建設の理念を自覚したいと思う。

そして、生活をクリエイトしながら、——活ける水——を求め、いつまでも枯渇することのない生命を支えたい。

(山田記)

秋の芸術祭

MIAタレントショウ

恒例の秋季東中央地方部大会は十月一日、二日両日にわたって盛大に催され、第一日目MIA、タレントショーは一日午後六時三十分から東京虎の門、日消ホールで幕をあけた。タレントショーに参加された各支部とも大会テーマにもとづき協力。努力、犠牲の精神が浸透され日常の各支部の活躍ぶりを充分、再現してくれた。

お国自慢、いわゆる郷土色に

盛られた春季大会にくらべて、遠来の支部のタレントを拝見できなかったことは惜まれたが、総体的に変化に豊んだ内容の充実したプログラムであったというのが、少なからぬ声のようである。

開会時には人のまばらなホール内も九時頃にはほぼ、うずめつくされた。最初の劇「ミキサー？」題名にふきわしく爆笑の渦を巻き起こした横浜支部。松本城を背景に美しい独唱と古舞踊を巧みにマッチさせ情緒をかし出した松本支部の創作に一斉のハク手がよせられる。

続いてバトンを受け継いだ東京中央支部による民踊は、広い舞台に美しく清らかなる花を咲かせ、十数人の揃いのゆかたが舞う姿に8ミリの音がしきりに鳴り響き、時々フラッシュがたかれ演技のすばらしいことを実証してくれた。又、幕のあい間には司会者の話術にジェスチャーよろしく絶えず私たちを笑いのるつ

ぽに導き、すばらしいタレントをひろうした。さらに柔らかに力量感のあふれるハワイ人宣教師によるコーラスも盛り上った雰囲気を一層、高めてくれた。MIAテーマをユーモアに生かした甲府支部は伝道の任務を果たされた、一人の宣教師の「思い出」をつづった素朴なほのかな人間味がにじみれた楽しい田園風景を展開してくれた。又、宣教師の「水上の白鳥」を思わせるリズムミカルな美しい舞踊といい、広いホールを考慮に入れた、舞台効果は今までの支郎に見られない研究の跡が見られ、大いなる注目を浴びた。

東京北支部による宗教劇「汚れたなき剣」は大会の最後を飾るにふさわしく、すばらしい出来ばえであり、多くの会員に感動を与え各人それぞれ強い証詞を得たことだろう。

こうした、多彩な芸能で盛られた楽しい夕べもなごやかなうちに九時閉会された。

(佐伯記)

MIA主催

松方コレクションを 観賞して

塩 英雄
(仙台支部)

秋季地方大会のMIA文化活動の一環として、松方コレクションの観賞会があることを知ったのは、佐々木長老から大会のポスターを描くように頼まれてプログラムの内容を教えてもらったときだった。

仙台支部のMIAではグループ活動の中に美術部を設け、スケッチ、デッサン、クロッキーなどして短時間ではあるが楽しい一時を過しているためかこの企画は本当に有意義で素晴らしいものだと思うた。

他の支部の方々も又同様に素晴らしいと思ったことだろう。上野の駅に着いたのは十月一日の一時半頃で土曜日だったせいか中高校生など学生が比較的多かったが、彼らと共に二・三分歩いて行くと

西洋美術館の入場券売場についた。

入場券売場のある出入口から美術館の入口までの間に広場があり、その中央にロダン作のカレーの市民の群像、左方に考える人、右方に地獄の門の像があった。

それは実に素晴らしく見る人の心を動かさずにはおかなかったろう。私は像をみながら次の様な事を考えていた。人は思考することによって他の動物と区別される。人は無智にして救われないし神の栄光を得ることは出来ない。人はその生涯に種々の経験や試練に合っている。あるいはその罪のために悩み悲しみ、苦しみ、もがき、心のよりどころと救いを求めてなききけんでいる。だが善を為し神の正義と真理を求め真の愛を行うものには恵みは大きいと教えられている。もし悪がなかったら善もないしそこには進歩もなく何の変化もない。従って天国や地獄についても考えることはないし考えてみようとしてもしないであろうと。ロダンの素晴らしい彫刻「接吻」その他多くのものは一階に陳列されフットラ

イトと天井からの明りで照し出され、その質感、量感、感触など見事なものであった。

二階にもロダン以外の作家の作品「弓を握る男」などあった。一階と二階とはなだらかな傾斜のコンクリートで連絡され二階の壁やついたてには大小の美しい絵がかけられていた。

私のすきなルノワールの絵

は色ずりの復写をはるかに上回りあのやわらかなタッチ、華やかな配色、画面上のなごやかな感触、すべてロマンチックな夢をいだかせるものであった。これと対称的なゴッホの作のバラの花は彼の心の中に燃える激しい情熱を花にあらわそうとしたのであろうか。

画面全体の線の強烈なタッチに白いバラがもり上げられていた。

私は何年前かに、東京美術館で開催されたヴァン・ゴッホの個展の中で特に「ハネ橋のある風景や、糸杉」のあの青い空や、もえるような緑の挿線の強烈な印象を思い出し

ていた。

ミレーの作品はしぶいかつ色調で、しっとりとした素朴さの中に、何か宗教的なふんいきを感じた。作品名は忘れたが舟にのった二人の婦人をえがいた、モネーの作品はこころよいスカイブルーが、長い点のタッチで水をあらわしておりその二人が楽しそうにのっている様子が、よくくみとられた。

一点ずつあげていうときりがないからやめるが、実に素晴らしい作品だった。ロダンのデッサンや、セザンヌのデッサンなども実に素晴らしいものであった。

ただ残念なことは、他の支部の人々と共に観賞し、またその感想などについて述べ合う機会がなかったことであつた。

しかし松方コレクションを観賞したことは、記念すべき印象として一生残ることであらう。

歴史的大会を終つて

一步前進した大会、私は今度の大会でそう強く感じた。おそらく私以外の多数の人たちもそう印象づけられたに違いない。

長い間私たちは日本人の手による地方部長会が出来ることを望んでいたものであった。その実が今こそ結んだのだ。

伝道部長の力強い言葉の端々の中にも、この喜ぶ出来ごととは真に天のお父さまの御心にかなうものであるという深い感じを受けた。日本に伝道が再開されて十数年、ここに一つの段階へと前進した姿を見ることは真に日本における神の御国の会員をして、すべての日本人会員の喜ぶべきことでありましよう。更に日本伝道部を再開されたマッシュウ・カウリー長老の言葉のように、東洋の島国におけるモルモンの模範、指導者たるべく真実のモルモンとして神のお国建設の開拓者たちとして一層の努力を払おと誰かが決心したのに違いない。

この新しい地方部長会、地方部評議員会の会員方はこれから、各支部を訪問し、親しく支部の会員である、あなた方と話し合い、支部の拡充と発展のために、また個人的援助のために、大いに活躍されることであらましよう。伝道部長が挙手することは単なる賛成か反対だけの意味ではなく、本当に選

ばれた指導者たちを支持し、援助し、協力し、共に考え、共に働くことを意味しているのだと云われた言葉を、これからは決して忘れてはならないだろう。

いかなる組織も、強力な団結がなければ、その目的を果すことは難しい。私たちが、今手にしたこのすばらしい組織を、本当に、日本人の手でもって立派にやっつけているのだと示そうではありませんか。

協調の精神、もし真実のクリスチャンならこの精神をもっともよく身につけている人でありましよう。

教会という団体が、あらゆる階級、あらゆる環境のもとにある人たちの集まりであればある程、主の言われた如く、まず心より謙遜になって、お互いを理解し合う

ことにつとめ、他の意見をよく聞き、正しいことを素直に受け入れる態度をもって養うなら、私たちはこの地において、すぐれたクリスチャンとして、モルモンの名を高め、神の王国の礎を一層、強くするであらましよう。これこそが今後に残された、会員一人一人の課題であらましよう。(福田記)

日本伝道部開設の由来

千八百九十五年、すなわち明治二十八年はいわゆる日清戦争の終った年であるが、この頃すでに末日聖徒イエス・キリスト教会の幹部が日本伝道に目をつけていたことは、当時の「コンツリビューター」誌に掲載された次の一文によって明らかにすることができる。

「当教会の幹部は、福音が遠からず有利に宣傳伝えらるべき国として、日本に關し最近稍々心を動かされたり。最近起りし日清戦争は日本がとりわけ文明の技術に於て、数年間に驚ろくべき長足の進歩を遂げたることを示せり。……日本がこの戦勝に慢心しうぬぼれることによりてその國民を腐敗せしむることなくんば、この東洋國民の急速なる進歩發展を防ぐるもの何ものもなかるべし」と（一八九五年十月「コンツリビューター」誌所載論説より）。

教会はこの時ウィルフォード・ウッドラフ大管長の管理の下にあったが、千八百九十八年ウッドラフ大管長逝去の後、ロレンゾ・ス

ノウ大管長の管理に移った。ロレンゾ・スノウ大管長は千九百一年の十月まで在任したがその在任の終りに近いころにいよいよ日本伝道部創立の件が具体化して、当時十二使徒評議員会の一員であったヒーバー・J・グラント長老が千九百一年二月十四日、日本伝道部開設のためにまず選ばれた。つづいてホレス・S・エンサイン、ルイス・A・ケルチおよびアルマ・O・テラーの諸長老がその事業を援けるために選ばれた。

千九百一年四月六日発行の「デゼレト・イヴニング・ニュース」紙（ユタ州ソルトレーク市）は「日本に伝道部開設」と題して、この時開かれた大会に於けるロレンゾ・スノウ大管長の言葉を次のように伝えている。

「次のような次第でこの考えが私の心に浮んだのである。ずい分前の事であるが……日本政府の高官の一行がワシントンへ向う途中ソルトレーク市を訪れたことがある……この一行はユタ州およびユタ州がモルモン教徒によつて植民開発された方法に多大の関心を寄せ

た。……また一行は、われわれがこれまで日本に宣教師を派遣していないことに著しい驚きの言葉を発した。このことは日本國民が進歩向上する國民であるという知識と共に、今に至るまで私の心に残っているところであるこれは、今日日本に伝道部を開こうとする企てをするに至った直接の動機ではないかも知れないが、おそらくそれと何らかの關係があったと思われる」と。

この高官の一行というのは、千八百七十年（明治三年）ころアメリカに渡った伊藤博文氏の一行を指している、というのは伊藤博文氏が日本政府派遣の留学生を連れてアメリカ大陸を旅行した際、ソルトレーク市のアンガス・Q・カノン氏と知己になったが、千九百一年今や日本に伝道部が開かれようとするに當ってカノン氏が次のような一文を「デゼレト・イヴニング・ニュース」紙に寄せているからである。

「私はもう長年の間、現在總理大臣の職に居られる伊藤伯（後の伊藤博文公）をよく知っている。私が始めて伊藤伯に逢ったのは千八百七十一年の春（明治四年）オグデンに於てであつて、私は伊藤伯と共にユニオン・パシフィック鉄道でオハマまで同道した。……伊

藤伯は数人の日本人学生を連れていたが、この学生たちは、伊藤伯に護られてアメリカおよびヨーロッパへ留学の途上にあった者たちである……伊藤伯は頭が良く、熱心である上に、海綿が水を吸う如く知識を吸収する興味ある性格の人物であった。……伊藤伯はモルモン教徒、その教義の起源、およびモルモン教徒が踏み越えてきた苦難等に強い興味を示した。そして、モルモンの歴史をくわしく話して欲しいと言ったので、私がその話をする

と非常な注意を以てそれを聞いた。……そして、もっと知りたいという希望をあらわした……私は伊藤伯に別れてから、私の兄弟であるジョージ・Q・カノン（註、ウッドラフ大管長およびスノウ大管長の第一副管長）のところへ手紙を書いて、「モルモン教」の原則が載っている書物の完全な表を伊藤伯の許に届けるように言った。……その後千八百七十三年、私はソルトレーク市で再び伊藤伯に逢った。その時伊藤伯は、数人の日本紳士およびワシントンから来たわが国の役人と同道していた。この役人は伊藤伯が私たちの教義と教会員について非常によく知っているのを見て驚嘆した。……私はその後三度目に伊藤伯とオグデンで逢った。……伊藤伯は私が日本

を訪れるようなことがあったら是非自宅を訪問して欲しいと切に勧誘したのであった」。

日本へ帰ってから「モルモン教徒とその居住する国、習慣および宗教に就いて好意ある解説」を施した報告を作ったのはおそらくこの伊藤博文伯とその一行であると思われる。

その後暫らくたって、千九百年（明治四十二年）にアイダホの住人で砂糖工業に關係のあった秋元某氏が商用で日本を訪れた。日本滞在中に、氏は会員でこそなかったが教会を讃めている友人として日本伝道本部を訪問した。そこで秋元氏は長い問アルマ・O・テラー長老と会談したが、いろいろの話をした中で、テラー長老は日本政府の高官である彼の友人が語ったという一つの話をして聞かせた。この高官の言うところによれば、グラント長老とその一行が始めて日本へ着いたとき、当時の伊藤侯（伊藤博文公）はモルモンの宣教師たちを公式に歓迎する公開の歓迎会を開きたいということを提議した。この時、仏教および神道の諸派はすべてこの提議に賛成をしたが、ただクリスチャンたちは一致してこの提議に反対をし、われわれはこのような歓迎会に招待されてもそれを受けることはできないと言った。そこで、このように好意

のないことがあらわれたことによって、伊藤侯はその提議を取り消した、ということである。

そして、テラー長老は「この招待の話がもし本当なら、これはわれわれの歴史にとって大きな価値のある大切な点である。何故なら日本人は最初からわれわれに対して寛大な態度を持っていることをそれが示しているからである」と言った（テラー日誌より）。事実この態度は今なおいたる所に見られ、これまでモルモンの宣教師に肉体的危害を加えたという記録は一つもない。

さて、ロレンゾ・スノー大管長が「このような手段をとるための時は熟したという提案と觀察と調査と」によって決定をした後、実際に伝道部を開くためのいろいろな動きが千九百一年の始めに開始された。日本伝道部開設の件は二月の十四日に十二使徒評議員会に提出され、十二使徒評議員会々員であるヒーパー・J・グラントに担当せしめることが提案され承認された。グラント長老はその提案を喜んで受け入れた。

この日本伝道部開設のことをユタの住民に発表するのは重大なことであって。住民の間に非常な関心を巻き起した。それは日本伝道部はそれまでにない新しい種類の伝道部であ

ったからである。それまで教会の伝道活動は、ほとんどキリスト教について何ほどの知識を持って居り、その習慣、言語、歴史などがよく知られている所にかぎられていた。

しかし、今や宣教師たちは西洋人が好んで「異教徒」と呼ぶ国民の中へ福音を伝えに行くよう召しを受けた。この計画全体に冒險小説的な気分があった。しかし、スノー大管長は前途を樂觀して次のように言った。

「われわれの努力に成功の冠が捧げられることを私は少しも疑わない。まことに、他の諸宗派が成功を収めているところにわれわれは失敗のおそれを抱く必要があるべきでない」と。

四月の大会に於て再び発表が行われて、また新しい関心が生じた。四月六日の「デゼルト・ニュース」紙は七段の全紙面をあげて日本に関する記事とグラント長老および長老に従って伝道に赴く召しを受け入れた二人の宣教師の伝記をのせた。

ここでグラント長老は「この企てはそれについて多くの『未知数』がある」と述べたが、「然り、私が成功をすると考えるのは日本人が驚ろくほど進歩的な民であるからである。もちろん私の知識は読んだり聞いたりして得

ただのだけである。……しかし、東洋の諸民族の中で日本人は疑いもなく最も進取的且つ聡明な民族である……或る權威者の言によれば、知識を吸収する段になれば彼らは世界のあらゆる民を顔色なからしめる」と言った。

大会が開かれている中に、この新しい伝道部についていろいろの解説が行われたが、「福音はこの神権の時代に於てあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国言葉の民、およびあらゆる人々に宣べ伝えなければならぬ」という言葉に基き、日本伝道が遂行されなくてはならないことが強調された。

(マレー・ニコルズ著「日本伝道部の歴史」第一章参照)

(三一七頁より)

ない、またあり得ない、天使の訪れは初期のキリスト教の師父が世を去ると共に止んだ、従つてこのような事は永遠に過ぎてしまったことなどを教え且つ信じていた。また、彼らの教義は父なる神と御子と聖霊とは、体なく部分なく感情なき測り知れざる者であることを教えた。父なる神と御子とが各自具体的に人間の体の形をしている体を

具えたもう別々の御方であるという啓示はどの啓示も閉された天の教義に関するものであるように、彼らの教義を破るものであった。世の人々は完全な宗教と完全なキリストの教会の組織を期待することができない。しかし、人間は自己の有っている理性によつて聖典に述べてある主の御言葉を解釈する導きを受けるとそれまで信じていた。

十一、誤った教義を大胆に攻撃する。

すべて以上のような誤った教えと言伝えを大胆に攻撃することは、それが十四才を越えた身分の低い一人の少年の口から信じ切った純真さで出たものであるとは言え、昔からそのように信じまた彼らの古い言伝えを切に愛していた人々に心の喜びと平安とをもたらしたそうにもなかった。それにもかかわらず、あの話は話さなければならぬ。それは永遠の福音の光が元通り回復しますように、また救いを伝える言葉が義しくない人たちの終りの来る前に証人として再び宣べ伝えられますようにと、同じ様に祈っていた無数の義しい人々が世界中にあったからである。

バプテスマ

德森森相長平島清山新仙島田田梅山阿川大酒
沢本本川井野沢水口津台田淵中原本部村宮井
貞孝達盟和信陽ミ亮育昭静弘泰美津忠順良
清子純男子子二淳子ナ卜子子子穂美子一子子

金 〃 広 〃 〃 〃 〃 〃 群 〃 〃 〃 〃 〃 〃 旭 〃 〃 〃 阿倍野
沢 島 馬 川

菅沼俊治	二階堂正和	神野房公	新垣清子	吉田十糸子	吉田勇	西山比佐子	笹島恵美子	片岡計子	肥後昭満	梅田憲造	尾山なお子	森麗子	長谷川美智子	渡辺かめ	村野康子	佐藤裕子	小野一夫	及川ケイ子	大井輝男	中田桂子	後藤良子
------	-------	------	------	-------	-----	-------	-------	------	------	------	-------	-----	--------	------	------	------	------	-------	------	------	------

“ ” “ ” “ 札 ” “ 三 ” “ ” “ ” “ 小 ” “ ” “ 岡 ” “ ” “ 新 那 ” “ ” “ 室
幌 宮 樽 町 潟 霸 蘭

清水武史	○執事	神 権	マがありました。	他に韓国で十二名のバプテスマがありました。	収田 三保子	大岡 良子	福子・シューメーカー	竹迫 道夫	長合 時子	安達 秀夫	渡辺 隆子	斉藤 百合子	笠松 道生	守田 哲也	青柳 英雄	石黒 静子	八幡 恒範	秋山 孝美	青木 喜久雄	茶木 静江	中山 澄子	大久保利夫
阿倍野					〃	〃	〃	横 浜	柳 井	〃	〃	山 形	東京西	東京南	〃	〃	東京北	〃	〃	〃	〃	東京中

高橋輝彦	旭川
山本修	名古屋
福屋航二	西宮
樋口国広	〃
山田明毅	小樽
○教師	
河野敏幸	旭川
西嶋吉春	札幌
○祭司	
松川護	新潟
佐藤勝幸	札幌

他に韓国で祭司一名の聖任がありました。

新任宣教師

デルバート・グローバーグ長老
 老（アイダホ州アイダホフォールズ）

ケント・ボイド長老（ユタ州ソルト・レーク市）

九月十五日来日東京中央支部にて伝道

新任宣教師

他に韓国で祭司一名の聖任がありました。

デルバート・グローバーク長
老（アイダホ州アイダホフ
ールズ）

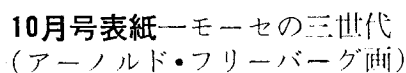
ケント・ボイド長老（ユタ州
ソルト・レーク市）

九月十五日來日東京中央支部にて伝道

阿倍野	旭川	福群	金	甲	松	室	新	西	岡	岡	小	三ノ宮	札	仙	東京中央	東京北	東京南	東京西	山	柳	横	普	那					
大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八	旭川市八条五丁目	福岡市薬院大通二ノ五五	高崎市並榎町二七五	広島市古田町古江四〇〇ノ三	金沢市成瀬町一一ノ四	野田方	甲府市富士見町一	松本市沢村一六〇四	室蘭市幸町八九	名古屋市中大畑町五五七	金井方	兵庫県西ノ宮市田代町一一一	大阪府豊中市岡町北二ノ一八	岡山市国富一ノ一一九	丹下方	小樽市富岡町一ノ三五	神戸市灘区篠原本町四ノ三五	札幌市北二条西二四丁目	仙台市光禅寺通り二八	東京都渋谷区八幡通一ノ三四	東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八	東京都大田区南千束町二四九	東京都武蔵野市吉祥寺三六八	山形市諏訪町三九七	山口県柳井市今市三九一	横滨市港北区篠原町二九	冲縄宜野湾村野嵩区三二八	冲縄那覇市松尾区一三九

地方部大会が、北海道を皮きりに、次々と開かれ始めました。この素晴らしい大会のシーズン、訪れた読書の季節に、聖徒の道は、経費の面で内容の面で一人前になるように、その一步を踏み出しました。聖徒の道は、定められた宗教法人の一機関誌として、教会員の信仰強化と連絡、一般人への布教という二重の目的を持っております。従って内容もこの二つの目的を満足させなければなりませんので、特に会員向と、一般人向、或いはキリスト教会員向等というように注意が払われて編集が行なわれております。この二重の性格は、完全に全ての読者を満足させないかも知れませんが、あなたの智慧によってそれぞれ向き、の記事を紹介され、一人でも多くの人に、聖徒の道を御拡売下さるようにと願うものです。聖徒の道は真に、あなたの雑誌なのですから、特に選ばれた編集部員ではなくとも、聖徒の道の一人の編集部員と考えられて、どしどし御投稿下さい。御批判、御希望をも、お待ちしております。

(福田)



北部極東伝道部

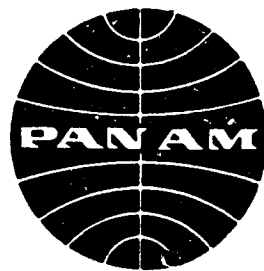
JETS

航空界のリーダー パン アメリカンが誇る 全世界を結ぶジェット クリッパーの航空網

- ・太平洋横断……………毎日就航
- ・香港へ……………週 5 便
- ・ヨーロッパへ(香港から)…週 6 便



パン アメリカンのジェット クリッパー*は太平洋と大西洋を結び アジアとヨーロッパの両大陸を横断 その上 北極もとんでいます 南米に於いてもパン アメリカンのジェット クリッパーはニューヨーク ブエノスアイレス間を時速1,000キロで往復しています



世界で最も
経験ある
航空会社

ご用命は最寄りの航空代理店又は弊社営業所で承ります
東京・千代田区丸の内 三菱商事ビル 電話 (211) 2441
大阪・北区中之島 大阪グランドホテル 電話 (26) 6043~9
名古屋・中村区堀内町 ニュー名古屋ホテル 電話 (55) 5131

*合衆国特許局登録商標